

569-142



1200501517520

569  
134  
142

全  
身  
二  
立  
時  
在  
身  
一  
三  
四  
坐  
扇







569  
142

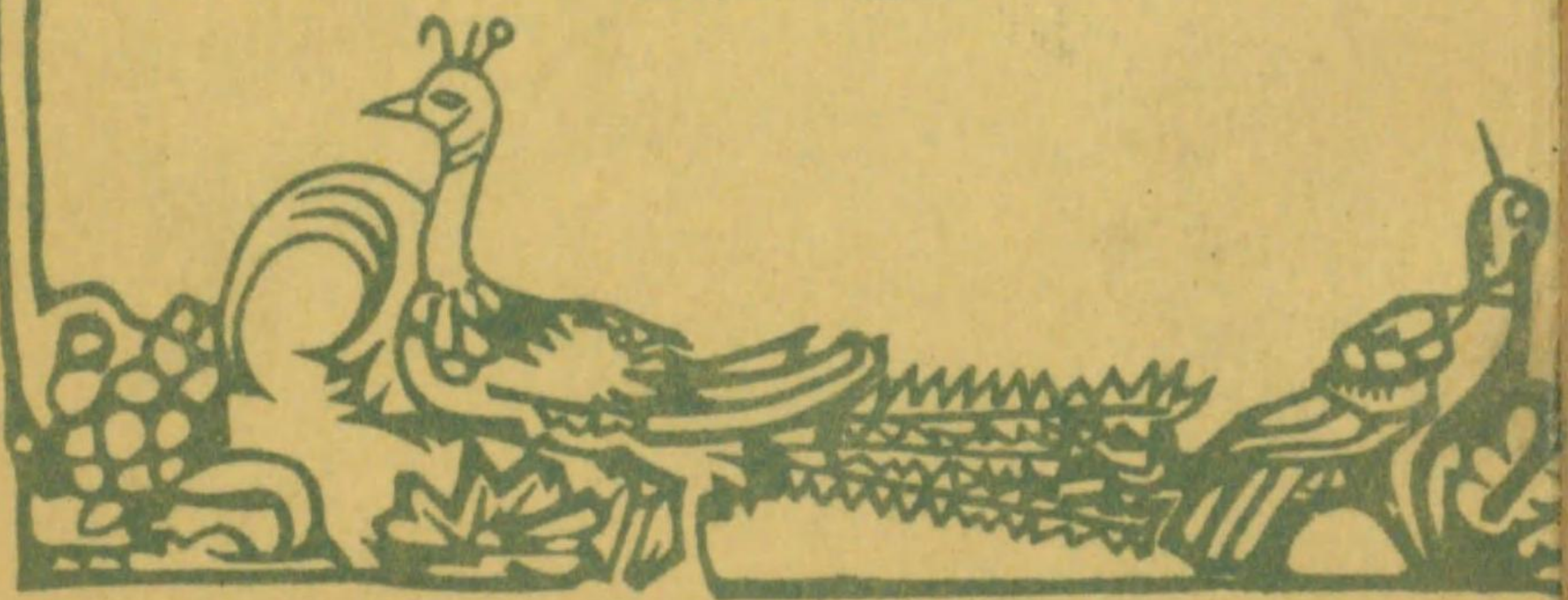
庫文造改  
篇四十三百第 部二第

者計餘・魂のつ二

著イボリブ・フコギノ  
譯肇 井 平



版出社造改



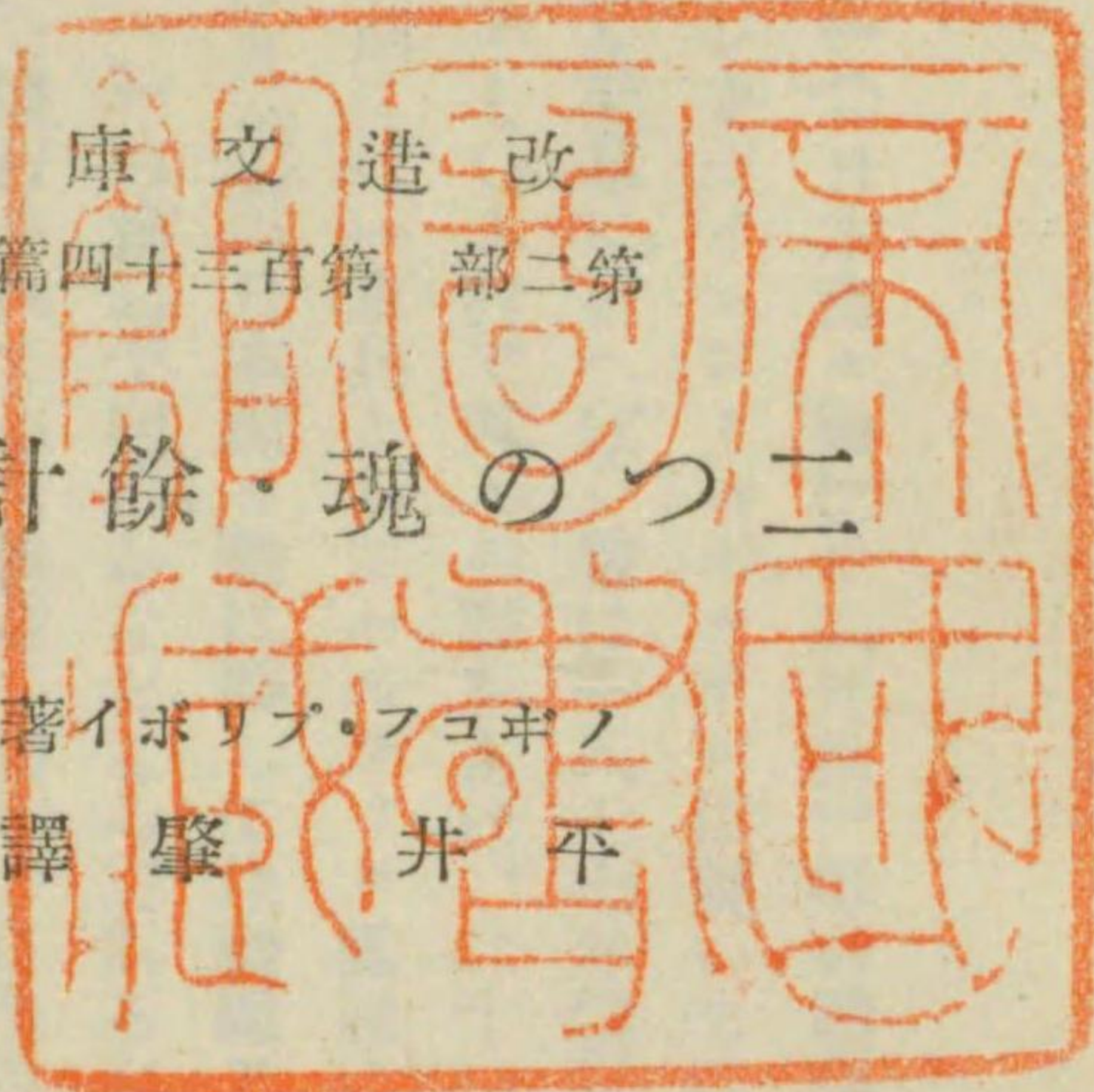
442

納本

改造文庫  
第二部 第三百四十四篇

二つの魂・餘計者

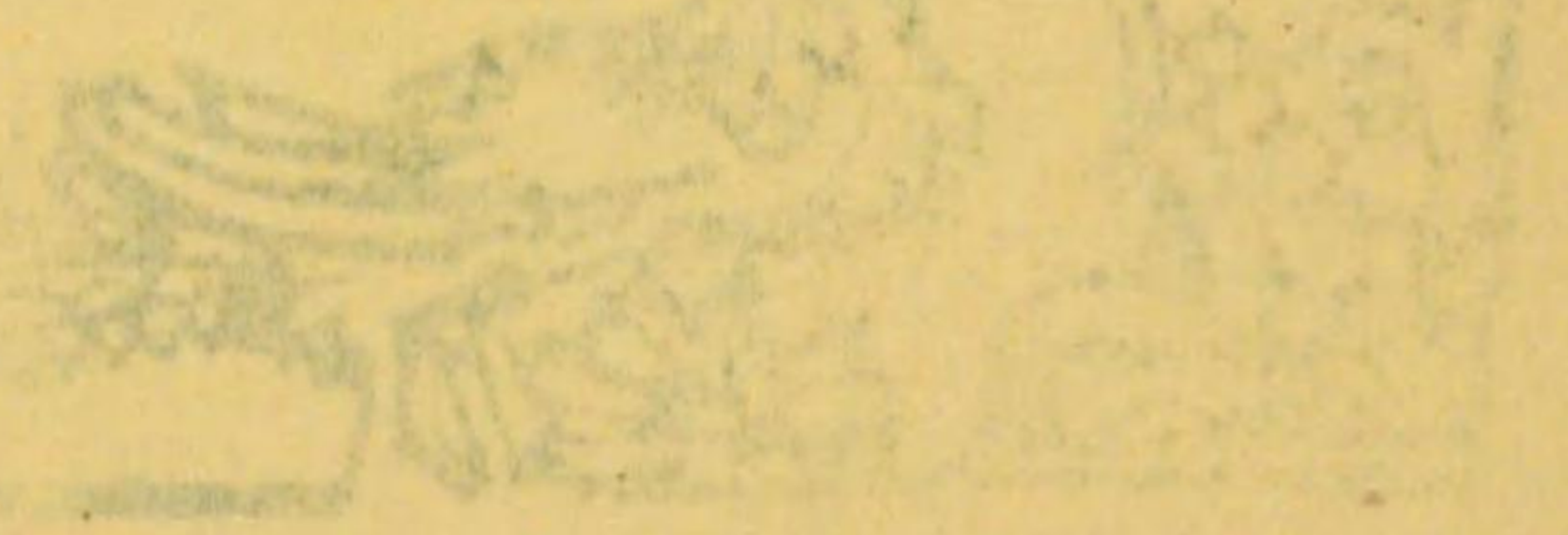
著イボリブ・フヨギノ  
譯 肇 井 平



改造社出版

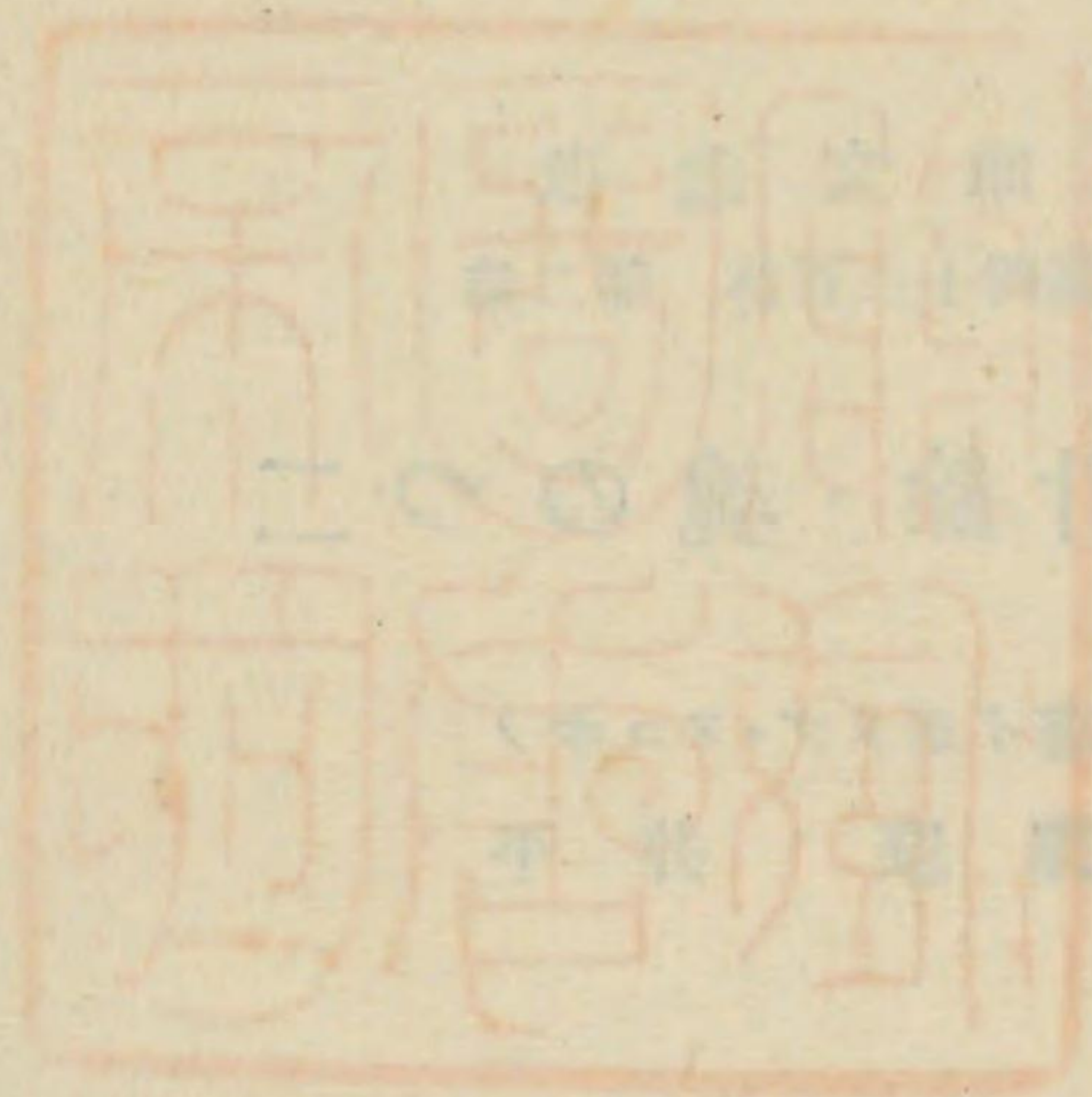


442



『ツシマ』（『日本海々戦』）や『死線』等の諸作で日本の文壇に夙に識られてゐるノギコフ・ブリ  
 ボイ（アレクセイ・シーロギッチ）に就いては、殊更ここで喋々する必要はないと思ふけれど、  
 その略歴を簡単に言へば、彼は一八七七年（明治十年）三月十二日にタムボフスカヤ縣下のマトウ  
 ゼフスコエといふ村で呱呱の聲をあげ、二十一歳の頃までは主として農業に従事した。かの政  
 治的覺醒期には一水兵としてバルチック艦隊に屬してをり、偶ま日露戦争に遭遇し、一九〇五年  
 （明治二十八年）の日本海々戦に際しては戦艦アリョールに乗組んでゐて慘敗を喫したいさかひ経緯は、名  
 作『ツシマ』の描寫で明らかなるところであるが、俘虜として日本内地（九州熊本市）に滞留ちう  
 俘虜の間で發行されてゐた雑誌に初めて自作の文章を發表した。一九〇六―七一年に、水兵ア・ザ  
 テョールトウイなる筆名をもつて、日本海々戦を取り扱つた作（『他人の罪を負ひて』）及び『狂人  
 と無益な犠牲』を二冊の小冊子として刊行したが、直ちに没收されてしまつた。一九〇七年から  
 一九一三年の間は、亡命者として英佛伊西の諸國及び北部亞弗利加地方を流浪した。文學的活動  
 に没頭するに至つたのは比較的近年のことに屬する。

## まへがき



著作は全集の形で一九二六年から翌年に亘つてハリコフ市の（プロレタリア）から全五卷に纏めて出版され、その第一卷の冒頭を飾つてゐるのが、茲に譯出した『二つの魂』で、『餘計者』も同じ卷中に收められてゐる。單行本としては、一九一七年モスクワで發行された『海洋物語』（『密航』、『土産』その他を含む）が最初で、次いで一九一九年にこの『二つの魂』が出版され、以後續々として諸作が上梓されてゐる。特に『二つの魂』は數ヶ所の出版所から刊行されて、各々版を重ねること數回に及んでをり、別に大衆むきの廉價版も出てゐる。それほどソヴェートに於ては多數の讀者を持つたといふことが出來やう。『餘計者』にも矢張り廉價版があるほどであるから同様に相當讀者に受けてゐるものであることが頷かれる。

この、『二つの魂』と『餘計者』とは、何れも日露戦争の俘虜物語で、作者の眼に映じた當時の日本の風物が窺はれる點等も、われわれ日本人讀者にとつて興味が多い。またブリボイの戦争物語といへば専ら水兵としての海戦描寫のみ終始してゐるかと思ふに、さにはあらで、『餘計者』に於ては稀らしくも、かの有名な奉天大會戦の陸戦描寫が試みられてゐる。作の内容や主題については贅言を弄するまでもなく、讀者が直接この兩者を一讀さるれば自づから明らかである。

x

x

x

譯者は親友ミハイル・グリゴリエフ氏に薦められてこの二作を通讀するや非常に興味を覺えたので、茲に拙なき筆をもつて譯出して江湖に見ゆる次第であるが、翻譯に際して、毎時のことながら、貴重なる時間を割いて多大の援助を與へられた同氏の厚い好意に對し深く謝意を表すものである。

一九三六年 初秋

天沼花園莊にて 平 井 肇

目次

二つの魂……………九

餘計者……………四五

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '二つの魂' and other illegible characters.

112 の魂

二の魂

魂



日本海沿岸の或る市まのはづれ、背の高い板圍ひをめぐらした大きな廣場に、俘虜の露兵を收容した木造のバラックが幾棟も建つてゐる。満洲の野で捕虜になつた約三千の兵がここで、遠い故國の空に思ひを馳せながら苦しんでゐるのである。同じ市の他の地域に收容されてゐる將校連のうち、稀れに顔を見せる者もあるが、ここでは下級の兵員だけが自分たちで炊事もすれば、内規もけて暮らしてゐる。ただ朝々、日本人の通譯が點檢にやつて來るぐらゐのものである。

初等教育を受けるために、臨時の學校へ通つてゐる少數の者を除けば、他の兵士たちはみな無聊に苦しんでゐる。襯衣だけに長靴ばきか、又は木製の日本下駄をひつかけた彼らは退屈さうにバラックからバラックへとほつき廻つたり、懶さうに草の上に寝そべつて日向ぼっこをしながら、千篇一律な蟬しぐれを聴いてゐる。中には、模糊たる輪廓をなして遠景に融けいつてゐる山だの、果樹や稻田の散在する廣々とした谷あひだの、軍艦や商船が碇泊し、大小の帆船が縦横に馳せまはつてゐる灣だのに惚れぼれと見とれてゐる者もある。一つのバラックの傍では、小さい人だけが玉ころがしを取り巻いて、何かがやがやと言ひ争つてゐる。その先の圍ひの傍で

は、時々、頭のうへへ貨幣を抛りあげては丁半に打ち興じてゐる。長い二列に建ちならんだ、障子窓をあけ放つた、ブラックの内部にも矢張り人がゐて、トタン張りの床に陣どつて手風琴をブカブカ鳴らしたり、三角琴をチャラチャラ弾いたり、長いテーブルに向かつて手紙を書いたり、小さい塊まりになつて骨牌遊びをしたり、話をしたり、暑さにめげて輾轉反側しながら晝寝をしたりしてゐる。

時刻は午後の四時ころであるが、太陽はまだ高く、赤々と照らしながら、炎熱で萬象を灼け爛らしてゐる。何處も彼處も生きとし生けるものをげんなりさせて、懶惰に導くやうな暑さである。空気が睡けを催はさせるやうにどんよりしてゐる。

突然、あるブラックの傍で耳をつんざくやうな狂暴な叫び聲が起こつて、俘虜全體は期せずして立ちあがつた。

——押へろ！……そやつをふん捕まへろ！……

叫び聲は次ぎ次ぎに傳はつて忽ち大きくなり、異口同音の怒號に變はる。最寄のブラックからは俘虜が駈けだして、何のことやらまだ分からず、あたりを眺めまはしては、いつたい何事が起こつたのだと互ひに訊ねあつても、いつかう満足な答へが得られないので、人々ががやがや騒いでゐる方へと駈けつける。と、垣根ぞひに、上半身を前へ泳ぐやうにして、肘を曲げた兩腕を上

へあげながら、白い襯衣を着た、髪の毛の黒い、づんぐりした一人の兵卒が一目散に疾走してゐる。少しおくれてその後ろから、互ひに足を踏んづけたり下駄を取られたりしながら、もう百人からの者がそれを追つかけてゐるのだ。

——遁がすものか、黒黨め！

——取りまいてしまへつ！

その兵卒は數名の者が自分の行手を遮ぎると見るや、ブラックの方へと向きを變へる。しかしそちらからも人々が喚聲をあげながら彼に向かつて飛びかかつて来る。長いあひだ彼は同じやうに木造建築の間をぐるぐる走りまはつてゐたが、たうとう四方八方から取り圍まれてしまつた。もう逃げ口がない。切羽つまつて恐怖に驅られた彼は、まるで猛り狂つた牡牛のやうに、自分の黒い頭を俯むけると、その頭で一人の男の胸もとへ打つかりざま、相手を轉倒させておいて、さながら物に怯ぢた犬のやうに素早く、昇降段の下の穴へ潜りこんでしまつた。

——ちえつ、畜生め、することにも事をかいて！

——ふん捕まへてやらう！

——もう、こつちのものだよ！……

群集は昇降段のさばりに折り重なつていきり立ち、激昂して喚きながら、口汚なく罵る。數名

の男が我慢しきれずに次ぎ次ぎに穴の中へ這ひこむと、後に残つた連中は外部から彼等に注意をする。

——お前たち、ナイフで刺されねえやうに氣をつけろよ……。

——長靴をはいた者が先きになつて行くんだ。足蹴を喰はしてやれ。足でなら、奴どうすることも出来つこねえから……。

昇降段の下で入り亂れた聲が聞こえる。

——かかつて来るか！……

——奴あ石を持つてやがるぞ！……

——出ろ、破落戸野郎、どうせやつつけられるんだ！……

誰かが身を屈めて穴の中へ丸太を差しこみながら言ふ。

——口の中へ突つこんでやれ——降参するから……。

昇降段の下が騒々しくなり、はあはあと喘ぐ音がする。

——ああつ、指に、指に咬いつきあがつた！……

——咽喉を絞めてやれ！

どうやら兵卒は捕まへられて、必死の格闘が演じられてゐるらしい。

外部の群集はいよいよ増して、一體どんな罪を犯したのか未だに不明なその男が捕まへられて外部へ曳きずり出されるのを今か今かと待ちあぐねてゐるのだつた。どの顔もどの顔も昂奮しきつて眞赤になり、暑さに汗ばみ、眼は貪慾さうに、きらきら光つてゐる。

今はもう我慢がなくなつて、人々は押しあひへしあひ、身を屈めては穴の中を覗きながらいきり立つ。その中でも大膽で喧嘩ばやい連中は、一同の前へ出しやばつて、もう格闘の用意に腕まくりをしてゐる。

やがて、昇降段の下から誰かの足が現はれ、それに次いでその男の體全體がぢりぢりと外へ出て來た。彼は逞ましい両手で、取り押へられた兵士の漆のやうに眞黒な髪の毛をむんづと引つ摺んでゐる。相手は眞蒼になつて頭張りながら、體を彎曲させて持ちこたへながら、嗚がれ聲を振りしぼつて同じ文句を繰り返し繰り返す。

——きやうでえ、おいらあ何も罪はねえんだ……。

——そ奴を明るみへ曳きずり出せ！——といふ聲がそれに應じて異口同音に叫ばれる。

——どんな結構な野郎だか見てくれるに……。

忽ち十本ほどの岩疊な手が彼を捉へて、一度に外へ曳きずり出すなり、バラツクの傍から彼方の方へしよびいて行く。

——途をあける！

無数の咽喉から出る物凄いいんり聲が、暑くるしい空中に響き渡る。數百の手が、まるで黄金でも掴み取らうとするもののやうに、群集の中心へ中心へと矢鱈に差し伸ばされる、——そこでは安定を失なつて倒れたり起きあがつたりしながら、人間の體や頭や、彎曲した背中やが、うぢやうぢやしてゐる。腹立たしさに喘ぎ喘ぎ、噎がれ聲を立てながら、生身の人間の體から成る球が地面を轉がつて行く。

この群集の物々しい騒ぎに惹き寄せられて新規の連中が駈けつける。

——一體どいつをそんなに小突きまはしてるんだい？

——どいつだか分かるもんか。

——どうしたと言ふんだ？

——なんでも、人を斬つたつてえことだよ。

——さうぢやない、骨牌でいかさまをやつたつてんだよ……。

づんぐりした一人の歩兵が説明するには、

——たつた今ブラックで俺らが聞いたところでは、そ奴はこの部隊を残らず毒殺しようとして企らんでをつたのださうだぜ。そいつの部屋で二フントからの毒物が目つかつたつてえことだ。……

……されたんだなあ。

——そんな悪黨なら絞首しほりくびにしても飽き足りねえぞ！——と、集團の眞中へ割りこんで行きながら、騎兵が口を挿んだ。

しかし後列の方から不腹らしい呟やき聲が沸き立つて来る。

——それあ、いけないよ、兄弟！……まづその男に一體どういふ罪があるか、取り調べなければならぬ……。

——もつともだ……、でなかつたら、どうなるんだ？ 上官がゐなければ何でも勝手放題なことをしてもいいつてことになるでねえか……。

——殴らせちやあならねえぞ！……引き分けろ！……

暴行の阻止を主張する連中がだんだん多くなる。彼等は頑強に、ずるぶん長いことかかつて群集を押し分けると、袋叩きにされてゐるその兵士を救ひ出した。やうやく自由になつた彼は辛うじて起ちあがると、よろよろしながら駈りあげてゐるが、襦袢は引き裂かれ、五體は腫れあがつて血まみれになつてゐた。

人集りは愈よ大きくなる。その一番まへには、臨時に他のすべての俘虜を取り締つてゐる首領かしらだつた連中が佇んでゐる。袋叩きにされた兵を指さしながら、その中の一人が訊ねた。

——一體この男がどんな悪いことをしたんだね？

俘虜の一人で、いかにも榮養のよささうな、生真面目な男が前へ進み出て申告した。

——この野郎はあつしの巻煙草入れを盗みをつたのです。

——ああ、さういふ譯か！……それぢやあ裁判にかけないでは済まされない。まづ證人を喚問しなければならんが……第一、判士には誰を選んだものだらう？

一同はいろいろの名前を呼びあげながら、長いあひだがやがや騒ぎ立てた。

——しいつ、がやがや喚き立てるのは澤山だ！——と、首領かしらだつた連中の一人で、縞の襯衣の上から、模様のあるズボン吊りをして、角刈の頭に眞直な分け目を入れた、額の狭い、いやに馴れ馴れしい中隊書記が、亂暴に麥稷帽子を振りまはしながら、鼻にかかつた聲で叫んだ。

次第々々に人聲が鎮まる。

——抑も裁判には、——と、その中隊書記が、まるで錆び朽ちたやうな面炮面づらを四方八方へ振り向けながら言葉をつづけた。——まづ第一番に法律學といふものが重要でなければならん。分かるかね？　そこで、その法律學を心得てゐる人を判士に選ばなければ駄目だ……。

——ぢやあ、お前さんに頼むことにしようや！——さういふ誰かの鋭い聲が聞こえた。すると幾百の人々が四方八方から叫び立てる。

——それがいい！……頼むことにしよう！……萬場一致だ！……

——では、致し方がない、公共事務を辭退する譯にはいかんから。——と、中隊書記が鼻にかかつた聲で言つた。

彼の指名によつて、もう二人の判士が選ばれた。

手近のバラックからテーブルが一脚とベンチ數脚が運び出された。そのテーブルには判士連が陣取り、それに面して被告が、そして稍や離れて側面には被害者と證人が控へる。

中隊書記が判士長の役を務める。彼は被害者を一通り訊問してから被告の方へ向き直つて、下唇を突き出しながら、齧齒の間から高びしやに言つた。

——すべて、本職が訊問することに對して、被告は正式に、といふのは、すべて法規に従つて、答辯をせんけれあならんぞ！——被告の姓名は？

——セミヨン・クリコフと言ひます。——被告はベツベツと血を吐き出しながら、やつと聽き取れるくらゐに答へた。彼の著てゐる白い襯衣は血まみれになつてをり、彼の顔はところどころ皮膚が破れたり紫斑あざが出来たりして腫れあがり、まるで腐肉の塊まりみたいだ。彼は誰の顔をも見ないやうにして、首を頂垂れたまま、苦しさうにハアハア喘ぎながら立つてゐるのだつた。

——年齢は？

——二十八歳です。

——妻帯してゐるのか？

——はい。

——子供はあるか？

——三人あります。

——自分の犯した罪を認めるかね？

クリコオフは掻き亂された黒い頭を一段と低く垂れたまま、押し黙つてゐる。

——返答をしないか、お前に訊ねてゐるんだぞ！——と、判士の一人で、顔ぢゆう褐色の剛毛に蔽はれた、岩のやうな恰好の男が横目で被告を睨みながら、嘎がれ聲を張りあげた。

——赦して下さい、判士の皆さん……。——とクリコオフはおろおろ聲で嘆願するのだつた。

法廷を取りまいた群集は死のやうに鎮まり返り、非常な緊張をもつて、息を殺しながら、自然なほど首を長くしたり、爪立つたりして、聲を呑んで聴耳を立ててゐたが、彼らの心は残忍で無慈悲だつた。

第一の證人として、胸に勳章を二つぶらさげた、獅子つ鼻の兵士が厚い唇をべちやつかせながら證言した。

——あつしが自分の寢臺に寢そべつてゐますとね、ついあつしの近くで、まあ言つて見れば、五歩くれえより餘計はねえ處で、金を賭けて骨牌をやつてるのでさあ、四人の者がね。巻烟草入れの持主のアニキンもその仲間だつたんで。よくある奴で、そのぐるりには人が集つて舞めいてゐるのに、クリコオフの奴は皆んなの後ろを離れねえで、一人の傍へ近よるかと思へば別の男のところへ寄つて行くといふ風にして、その眼はしよつちうアニキンの枕もとを狙つてゐるんでさあ。こいつあ臭えぞと、あつしあ思ひましてね、眠つてゐるやうな振りをして眼を伏せながら、奴さんの舉動を見張つてゐたんですよ。するてえと、アニキンが札を切りにかかつたのです、するとクリコオフの奴が、さつと手を枕の下へさしこんだのです。見るてえと、巻烟草入れを抜き取るが早いか、それを自分の長靴の胴へ押しこんだのです。そして身を起こすなり、さつさと入口の方へ行きまさら。その時ですよ、あつしが嘔鳴つたのあ——泥棒を取り遁がしちやあいけねえと思ひましてね……。

證人はテーブルを離れて、ベンチへ戻つた。

——なるほど、それは非常に重要な證言だ。——と、判士長はちよつと腰を浮かして、黒い口から齒を視けながら鼻聲で言つた。——これは残らず調書に作製しておくべきだが、ここには書記がゐない……。

——暗記でやるさ！——と、岩のやうな恰好の判士が口を挿んだ。

——おれもまつたく同意見だよ。——と、もう一人の判士の、大砲照準手が判士長の方へ自分の稔栗頭を一つ振つて言ひ添へた。

クリコォフと同じ中隊でともに勤務してゐた二人の證人が呼び出されて、被告の行狀について訊問を受けた。

——別段、この男について悪い評判は聞いてをりません。——と證言して、その同僚たちは却つてクリコォフのことを賞讃しはじめた。

——嘘つばちだ！——と、聲高に誰か群集中の一人が金切り聲をあげて遮ぎつた。——そ奴らも同んなじやうな悪黨に違えねえぞ！

群集は、まるで電氣でもかけられたやうに急に活氣づいて、重々しくどよめき始めると同時にやたらに手を振りまはしながら、威嚇するやうに喚きだした。

——彼奴らは同じ穴の狐だぞ！……

——そいつらをやつつけちまへつ！

——路骨ちほろの勘定をしてこませ……。

被告はおどおどしながら、まるで出来るだけ小さくなつて成可く人目につかぬやうにと骨折る

もののやうに、身を縮める。

證人たちは猛り立つ人波を押し分けるやうにして、顔色を變へて、びくびくあたりを見まはしながら、席を退つた。

海の方からは、大氣を震はせながら、けたたましい汽笛の聲が聞こえて來た。一同は期せずして振り返つた。灣内へ泥灰色の偉風堂々たる戦闘艦が、大砲の黒い孔口で四邊を威壓しながら、波靜かな紺青の海を深々と切り開くやうにして、澄んだ空を濛々と烟らせながら入港して來るのであつた。その軍艦は急回轉をすると、投錨した——三叉の怪物が海底へ沈むにつれて、音たかく鐵の鎖がガラガラと鳴る。

灣内の全幅にわたつて潮が波立つて、あだかも睡氣を拂ひ落されたやうに、歡ばしげに陽光を受けてキラキラと輝やきだした。

判士長はつと立ちあがると、兩手の母指を模様つきのズボン吊りにかけて、思ひきり胸を張りながら、クリコォフに向かつて言つた。

——被告！ わしは判士長として選ばれた以上、いはば公然と、君を罰するなり赦すなりする權利をもつてゐるのだぞ……。

クリコォフも同じやうに立ちあがると、辛うじて足をささえながら、眼のやりばに困つて立ち

つくした。

四邊はあたかも雷雨の來る前のやうに不吉な、緊張した静けさにとざされた。

——だから、君は懺悔聽問僧に向かつてするやうに、わしに自分の犯した罪を正直に白状しなければならぬのだ。——ここで判士長はちよつと躊躇つてから言葉をつづけた。——結局それが君の利益だ。どちらにしても遁れられることではないんだから……。

漂渺たる蒼空に鶯が舞ひながら、地上へ暴々しく、まるで人間の聲のやうな切れ切れの三拍子の鳴き聲を浴びせかける。

——かん、かん、かん！

意氣阻喪して、見るも哀れなクリコォフは、じつと押し黙つてゐる。

——さあ、どうだ？！

被告はやつと初めて頭べをもたげると、恰かも群集の側からでもせめて何らかの支持を、喩へ僅かばかりの慈悲でも示されなかつたかと、庇護を求めるもののやうに、涙の間から嘆願するやうにぐるりを見まはした。だがそれは駄目である！彼の眼の前にあるのは、犇々と四方から出口を塞いでしまつて、じつと緘黙した群集に過ぎなかつた。まるで大地から生えたもののやうに不氣味な不動の姿勢を取つて立ちはだかつた人々の體から成る、隙間ひとつ無い牆壁が八方から取り

まいて、その上部には、軍帽をかぶつたのやかぶらぬのや、毬栗頭のや蓬髪やの、西瓜みたいにまん丸な頭が、つくつくと並んで、ひたぶるに罪人に對する情け容赦もない敵愾心に満ち溢れてゐるばかりであつた。多種多様な幾千の顔が彼の方を向いて、顔なで不氣味で謎めいた一つの共通な顔に融けあつて、無数の眼の重苦しい眼眸をもつて彼を壓倒してゐた。だが、その先きの、さうした親しみのない人々の後ろの木柵の彼方には、灼けるやうな陽の光りを浴びながら、花咲く谷間や、奔放な山のジグザクや、青い海原が、一種情熱的な戦慄の中に手招きでもするものの如く美しく展開して、恰かも萬象が幸福と歡喜とに燃え立つてゐるやうである。ブルツと身顫ひをして被告はむつとり首を頂垂れると、深い吐息を一つついてから、まるで一語々々を無理やり口から壓し出すやうに、空ろな躊躇ひがちな調子で語りはじめた。

——申譯ありません……魔がさしたのです……生まれて初めてこんな罪を犯しました……赦して下さい……。

そして彼はちよつと蹣跚くと、ぎこちなくベンチへ崩折れかかつたが、既に判決を言ひ渡す準備の出來てゐた判士長の指圖で、二人の若者がその兩腋をつかまへて彼を坐らせなかつた。クリコォフは睫毛で眼を伏せたまま、口を嚙んでゐたが、腫れあがつた彼の顔をつたつて大粒な涙の雫くが血に混りながらポロポロと零れ落ちるのだつた。



——いはば自分の兄弟も同然の戦友から巻烟草入れを竊取したのであるから、犯人には棒打ち百を科するのが至當である。——と判士長は人差指で被告の方を指さしながら、黒い口をあいて鼻聲で宣告するのであった。——しかし、自分から罪を自白したことであるから、笞二十五を免ずるものとする。尙その上、被告は既に若干、流血の難に逢つてゐること故、更に二十五を減ずる。都合、法律的に被告に科する棒打ちはちやうど五十かつきりである……。

——かん、かん、かん！——と、恰かも判士長を愚弄するやうに、今はもうずつと低く、灼熱した空中に圓を描きながら、鶯が人間の聲のやうにはつきりと、聲たからかに叫んだ。

——これが當を得た判決だらう、諸君、ああん？——と、判士長は勝ち誇るやうな微笑を錆びたやうな顔に湛へながら、群集の方を向いて言つた。

群集はこの判決に賛意を表して、あらしのやうな拍手と喝采を送つた。

まだこの裁判の進行ちうから、まるで、どんな判決が下るかを豫知してゐたもののやうに、二三のお切懸な連中は、もうちやんと、笞刑に用ゐる棒を準備してゐた。数名の者が群集の中から飛び出して行つて罪人を取り押へると、僅かに弱々しい反抗を示すだけの相手をその場に捻ぢ伏せて、その體を素裸かにして、その顔と両手と兩足の上へ乗しかかつた。兩脇には自分から役を買つて出た刑の執行人が一人づつ腕まくりをして、さあ何時でもと言つた身構へで突つ立つた。

——皆んなによく見えるやうに、もつと大きく擴がれい！——と、誰かの威力のこもつた聲が命令した。

やがて廣い圓陣が形づくられると、次ぎ次ぎに空中へ笞の唸りが響き出した。

——一つ！ 二つ！——と、罪人の足もとに立つた數取りが大聲で笞數を呼びあげる。

クリコオフは一種特別な傷ましきをもつて、犬のやうに口を歪めて悲鳴をあげ出した。裸かの體には見る見る二條の大きな笞の痕が十文字に腫れあがつた。

刑の執行人はお互ひに笞の手際を競争でもするやうに、ピシリピシリと打ちおろす。それを傍から刑場を取りまいた民衆が煽り立てる。

——打つては引くやうにしるよ——餘計きつく利くだから……。

——親爺やお袋の名前も思ひ出されなくなるほどピシピシやつつけてやれよ！……

數取りは一笞々々にうなづきながら、平然として數を讀んでゐる。

——十三！ 十四！

クリコオフは身もだえしながら、蒼白めた顔を横へ捻ぢ曲げ、愚かしく眼を剝いて、口から泡を吹きながら、聲を限りに叫ぶ。彼の全身は小刻みにブルブルと顫へ、笞の浴せられる個所には滅多矢鱈な痕が赤紫の色を帯びて来て、噴き出る血の雫くが滴たり流れる。

——うめえ飾りをつけをるぞ！——と、群集の中から叫び聲があがる。  
——模様がついたつきりのことさ！

刑場へは、市内の散策から戻つて来たばかりの新らしい連中が寄りたかつて来る。彼らは前の方へと押し分けて出ながら訊ねるのだつた。

——何の科で打たれてるんだい？

それに對しては種々と説明が與へられたが、中には又しても毒物の話を持ち出して、罪人の手許には十斤からの分量が発見されたなどと言ひ出す手あひもあるのだつた。

——二十九！ 三十！

ぐるりでは、群集を煽りたてるやうに、不満の叫びが沸き起こる。

——そんな悪黨野郎が答ぐれえで懲らしめられるもんか！

——まつたくだ……答で仕置の出来るのあ子供だけだよ。大の男にやあ、そんなものあ屁でもねえや……。

——何をぼかんと眺めてゐることがある——土足で踏み潰してやれい！

——丸太で土性骨を叩き折つてこませろ！

忽ちのうちに、勝手放題な叫び聲が八方に擴がると同時に、それが一つに融け合つて怖ろしい

憤懣のどよめきに變り、人々の頭を掻き亂して、その内心を憎惡の毒をもつて充した。またもや陰慘な心の奥底から血に對する獸的な渴望が頭を擡げると共にそれが急に燃えあがつて、自分たちも參加して罪人を責め苛なみ、相手の斷末魔の痙攣に酔ひしれたいといふ慾望が各人を唆のかすのであつた。もはや物の道理を考へたり判断を下す個々の人格といふものは無かつた。そこにあるのは只、内心に潜在する或る力に動かされた、自然力そのもののやうに盲目的で輕率な、怖ろしく猛り狂ふ群集であつた。前列にゐる者は後ろからの壓迫に堪えかねて將棋倒しになる。人はまるで酩酊したもののやうに、狂氣じみた怒號を空中に漲らせながら、長いあひだ右往左往してゐるが、つひに又もや罪人に向かつて、したたか鐵拳の雨を下し、さなきだに無慙にされた體を蹴かへし蹴かへし、まるで蝮かなんぞのやうに土足にかけて踏みにじるのだつた。

——そんなことをするのは暴動だ、眞正銘の暴動だ！——と、群集の中心から押し出されてしまつた判士長が苛だつて喚き立てた。——法の破壊行爲だ！ そんなことをすれば、お前たち自身が管刑を喰はなきやあならんのだぞ！ 間拔けどもめ！

しかし、彼の叫び聲に對しては誰ひとり注意を向ける者がなかつた、——それどころか、比較的穩やかな連中までが、狂暴な群集心理といふ、この最も怖るべき人心の惡疫に感染して、ひたぶるにその野蠻な私刑の行はれてゐる方へ心を奪はれるのだつた。

銃を手にした日本兵が駆けつけた。

——散れ！ 鎮まれ！——と、両手を振りまはしながら、日本軍の通譯が正確な露語で呶鳴つた。それは小柄なテキパキした男で、白い洋服を著てゐた。

彼の聲は、半殺しの目に逢はされてゐるクリコオフを取りかこんで、尙もつづいて暴れ狂つてゐる群集の喧々囂々たる怒號に掻き消されてしまつた。

空へ向けての小銃の一齊射撃が轟ろいた。俘虜たちは四方八方へ飛びすさつて、きよろきよろとあたりを見まはしながら立ち竦んだ。

陽のかんかんと照りつける青草の上に、平べつたくなつて、何とも形をなさぬ鮮紅色の斑點のやうに、クリコオフは身じろぎもせず横たはつてゐる。短かい痙攣が時々その體を走るだけである。

——實に亂暴きはまる！——と、通譯が憤慨して言つた。——ちつとも規律がないのだ！ 君たちに規律といふものを教へてやるぞ……。

彼は長いことかかつて事情を問ひ訊した。俘虜たちは、最初はおぼおぼしてゐたが、そのうちに大膽になつて、互ひに話頭を遮りながら、クリコオフの犯した罪狀を彼に説明した。その日本人は黒い小さな眼を屹と鋭く見張つて一同を眺めながら、頭べを振つた。

——いやはや、君たち露助といふ連中はどうも。なるほど、君たち正教徒の美德は大したものだよ！……

彼の聲には皮肉な響きがあつた。

通譯が立ち去る、その後から、用心ぶかくクリコオフを抱きあげて日本兵たちも去つて行つた。陽が春いて暑氣も和らぎ、蔭影が多くなると共に、群集の殘虐性も急に消え去つた。しかし俘虜たちは解散しようともせず、やはりその草の上に坐りこんだり、或はずつと立ちつくしたまま、ポケットから巻煙草を探り出しながら、ひそひそと互ひの印象を語りあつてゐた。

——あん畜生め、もうちよつとで俺の指を咬ひちぎりくさるところだつたよ。——と、一人の兵士が指の血を吸ひながら、ぼやいた。——その代り、いい心の慰めになつたよ！ 彼奴の局部またを思ひつきり踏んづけてくれたのさ！……

——ところが俺はたつた一つ喰はしてやつただけけれど、奴さんちよつとにやあ忘れめえよ。——と、他の一人が笑ひながら物語るのだつた。——丸太の尖端きでもつて、いきなり奴の鼻面をいやといふほど突き飛ばしてくれたんだ！ ガツといふ音が聞こえたくれえさ！……

——ああ、おれあ何だか心配だよ、みんなあ、何かよくねえことにでもならなきやあ良いがなあ……。——と、一人の痘斑づらの兵が、あたりを眺めまはしながら、妙に氣づかふ。

——よくねえことつて何だい？——と一同が訊ねる。

——死ぬかも知れねえよ、ひよつとすると……。

——誰が？

——クリコオフに決まつてらあな、誰が他に……。

しかし誰ひとりそんなことを望むものはなかつた。

——無闇なことを言ふない。あの場で斃らなかつたのだもの、病院でちやあんと以前の體になるさ。あすこちやあ、お前、一ぺんに治療してしまふんだよ……。

誰かの低音が確信をもつてかう證明する。

——なあに大丈夫、暫らく寝てれあ快くなるよ。さうでねえか、よく女房つこをどんな目に合はせるか知つてるぢやらうが——女房つこはペチカで殴たれねえただけで平氣の平左で——びんびんしてらあな！

——それあ女房つこのこんだが、あれあ男だでなあ。——と、いつかな痘斑づらの兵は承知しない。——女房つこは、さういふことにやあ慣れてるだけんど……。

——いんにやおいらの村でこんなことがあつただよ。——と、もう先刻から口出しをしようとしてやきもきしてゐた髯づらの歩兵が語り出した。——やつぱり同んなじやうに泥棒をふん捕めえただよ。そいつは隣り村の野郎だつたがね。だもんで誰あれもそいつにやあ指いつぽん觸れなかつただよ。それに何でまた人間の面を臺なしにすることがあるだ？ で、そいつの踵へ機械釘を打ちこんでこまただけさ——尤も抜き取れねえやうに、笠のねえ釘を使つただが、——さうして放免してやつただよ。さあ達者で行きねえ！ つて譯さ。ところが、どうだ、一歩もえう歩きをらねえのさ！ 四つん這ひになつて家へはいずつて行きをつただが、その後を皆んながぞろぞろ隨けて行つたものさ。村ぢゆうの者がさ！ 二露里ばかりの道程をそんな風にして送つて行つただよ。それも皆んなで桶や爐蓋をドンチャンドンチャン敲きとほしてさ……。ええ慰みだつたよ、まつたく！……。

それに次いで他の連中がめいめい同じやうないろいろの出來ごとを物語つて、やがて又、クリコオフのことへと戻つた。

まだ髭も生えない、物靜かな、羞かみやの若者が、まるで少女のやうな紅顔に、おとなしい無邪氣な表情を浮かべながら、あけすけにこんなことを打ち明けた。

——ねえ、皆んな、人間の眼球つてずるぶん強いもんだねえ！ おれがあいつを刮り抜いてやらうと思つて、どんなに骨折つても駄目なのさ！ 爪がつるりと滑つてしまつて、眼球はどうしても抜けて來ねえのさ！……。

くつくつ笑つたり、巻烟草をふかしたりしながら、一同は長いあひだあの事件について語りあつて、まるでお互ひにめいめいの殘忍さを自慢でもするやうに、細々したことまで吹聴し合つた。何の怨恨もなく、彼等は好人物らしく語りつづけてゐたが、そこへクリコォフが死んだといふ報告が齎らされたのである。

一同はハタと口を噤んで、さながら故人の死に愕然としたやうに首を項垂れた。陽氣な氣分は一時に消え失せて、めいめいの心のうへには黒い陰影がかざされた。

陽は天際に落ちかかつて紫紅色を帯びて來た。大地は一帶に紅みを帯びた反映に染められて夕焼の別れの接吻に恍惚となりながら、青葉と花で微笑んでゐる。頂上に縮れ毛のやうな茂みを戴いた目近の岩山の峰から、長い蔭影が海面へと伸びる。蟬は愈よはげしく益す旺んに、てんでの婚宴を祝しながら、鳴きたててゐる。

——謂れもなしに人間をひとり殺してしまつただよ。——と、俘虜の一人で、大柄な、屈託さうな男が、まるで獨語のやうに呟やいた。

——ほんとだ、まつたく謂れもなしになあ。——さう誰かの木訥な聲が躊躇ひがちに同意を表した。

だが三人目ののは、もうかなり大膽にこんな風に言ふのだつた。

——あんなことぐれえ、ちよつぱり懲らすだけでよかつただよ。それあ盗みはよくねえか、ただけど、何だつて人間を殺めるのだ？ それも原因はと言へば、ブリキ細工の巻烟草入れ一つでねえか！……あんな物あ、市の日にせいぜい五十錢玉ひとつが關の山といふ代物でねえか！……ちえつ、下司野郎どもつたら！

一同は殺人行爲に憤慨して、一時にがやがや騒ぎはじめた。中には故人に同情を寄せて、若しかしたら彼はまつたく冤罪であつたかも知れない——第一、彼はその巻烟草入れを持つてゐなかつたし、自供したのは驚愕のあまりか、それとも記憶力が混亂してゐた結果かも知れないなどとさへ言ひ出す者もあつた。事件の發頭人や首領だつた連中に對して途方もない惡罵が浴せかけられた。

——判士になつた野郎どもが一體どんな奴らなんだ？——と、鋼鐵のやうな眼をぎらぎら光らせながら、無帽で襯衣をはだけた髯づらの工兵がいきり立つ。——賭博者ぢやねえか、いかさま師の！ その癖、何か悪いことはねえかと、そればかり狙つてけつかるんだ……。そして吐かすことがかうだ、わしはお前を罰するなり赦すなりする權利を握つてゐる！……第一あいつ自身は何者だい、あの判士長になりやがつた野郎がさ？ 酒つ喰ひで、しやうのねえ狗畜生でねえか！ ベツと唾を吐いて足でこすれあおしまひつて代物さ……。執行人を買つて出くさつた野郎どもも

やつぱり忌々しい悪黨だよ。あの一人の方は同じ中隊にゐた野郎だが、營倉へ打ちこまれてゐたことがあるんだよ……。

悔恨の情が一層ひしひしと廣範圍の人々を捉へはじめた。

暗い顔をした、背の高い、瘦せた騎兵が、體を曲げたり首を捻ぢまはしたりしながら、罅の入つたやうな聲で喚きたてる。

——なあ、皆んな！一體おれたちは正教徒なのか、それとも外道なのか？ おれは諸君に訊くんだ——われわれは何者か？ 何だつて基督教徒を殺したのだ！ やうやく敵彈から免れて生き残つた一人の人間を、おれたち味方の者が捕まへて叩き殺してしまつたのだ……。一體おれたちの良心は何處にあるんだい？ おれたちは……。

息をつまらして彼は病的に咳きこむ。するとその時、誰かの高いテノールが助言する。

——主謀者どもの脇骨を叩き折つてこまさにやあなんねえよ……みんなこれは奴らから起こつたことなんだから……。

——おれはあんな忌々しい野獸どものことを今更かれこれ言ふのぢやあねえよ！——と、元氣を取り戻して、再び騎兵ががなり立てる。——おれが言ふのは、故人にちやんとした葬式をしてやつたり石碑を建ててやつたり、また彼の遺兒へ少しばかりでも金を送つてやるための献金を

募ることなんだ。それが基督教徒として當然の務めだと思ふんだよ……。

一同は只管にさうした提案を待つてゐたと言はんばかりに、大歡びでそれに賛成した。するともう幾百の聲が相交錯しながら、唸るやうに喚き立てた。

——まつたくだ……。かういふことになつた上は、ぜひ献金でもしなければならねえや……。

——おれたちも回々教徒ぢやあねえんだぞ……。

——おいらは賛成だ、一同異議なしだ……。

そして、さつき私刑用の棒が準備されたと同じ速さで、故人のための献金の用意がはじめられた。

太陽はもう見えない。山の顛きはまだ入り日の反映をうけて輝やきつづけながらも、さながら彼方へ泳ぎ去るもののやうに一段と仄かになり、消え萎んで、つひにはただ夢現の中に見えてゐたかのやうに全く掻き消されてしまふ。暖かい星月夜が迫つて來た。全市は色とりどりの灯の群がりとなつて、暗くなつた海の方へだらだら下がりになつてゐる。灣内の小艦隊も照明をつけた。黒い水面を、或は幾つにも分かれるかと思へば、また一つに塊まりながら、まるで火の蛇がうねり廻つてゐるやうである。

木造のバラツクの内部では、俘虜たちのあひだを絶え間なく帽子が廻されて、その中へ氣前よ

く投げこまれる鏡の音がチャリン、チャリンと響くのであつた。

二日たつた。

朝まだき、庭の木蔭ではこんもり繁つた亞熱帯植物の梢や、花や、青葉に、まだ乾かぬ朝露の玉が寶石のやうな光りを放ちながら顫へてゐた。そわそわしてゐるやうな市の街路を、時どき十字路で立ちどまりながら、物悲しげな行列がもう静々と進んでゐた。それはクリコオフを野邊に送る葬列であつた。かはるがはる四人づつの兵によつて擔がれる黒い棺の後ろに隨いて、蜿蜒たる俘虜の列が歩調を合はせて韻律的に揺れながら、整然として行進して行く、——導師はなしにただ大きな合唱隊を先頭にして。その中には、刑の執行者も、判士連も、例の流血の慘事に關與したすべての連中も混つてゐた。

物悲しい哀調を帯びた葬送歌の音波が朝の大氣の中に擴がりながら人々の心に哀悼の情を浸みこませ、死のことや、この素晴らしい大地と人の魂との別離のことを想ひ起こさせるのであつた。

一同は無帽の首を項垂れてゐるが、すべての者の顔には詐りなき哀愁の色が浮かんでゐた。だが、頭上からは、青空のそこに撒きちらされて微睡んでゐるやうな斷雲の隙から、生命を賦與する太陽の光線が降り灑いで、生活に歡びを點火しながら、玩具のやうな民家や、巨大な

佛寺や、珍奇な塔や、すがすがしい園の緑りの上に陽炎となつて戯れてゐる。市内は清楚と光輝と愉悅に漲つてゐる。開け放たれた店舗には種々雑多な商品の堆積が眼を奪ふやうに陳列されてゐるので、それに視線を向けずに通り抜けることが出来ない。咲き亂れた藤の紫につつまれて並ぶ人形の家やお茶屋や四阿。小さい庭園には花々がおのおのその唇を綻ばして、太陽に向かつて感謝を捧げるものやうに微笑んでゐる——紅や白、黄や紫の、華美に又つづましましやかな、とりどりの色調の花々。その上には又、巨大な枝を張りひろげた樟や、松や、巨人のやうな杉の樹が嚴めしく聳えてゐる。あらゆる日本の住民が街路へ出てゐる——敏捷で、好奇心の強い彼等はいつも必らずその黄いろい顔に微笑をたたへてゐる。彼等は葬ひ歌に惹きつけられて、四方八方から、この物珍らしい光景を見物しようとして駈つけつける。到るところに子供が群れつどひ——淺黒いまるでラックを塗けたやうな肌をてかてかさせて、愉快さうな聲でがやがや喚いたり、色さまざまな著物で邊りを彩りながら、嬉々として戯れてゐる。

墓所は郊外にある高い丘の上で、枝を屋根のやうに奔放にひろげた二本の栗の樹の下蔭に準備されてゐた。そこからは、透きとほるやうに青々とした遠景が廣々と展開して、さながら天地創造の最初の日に凝結したままの巨大な波濤かとも思はれるやうな屹立した山々や、灰いろの薨のスロープとなつて灣の方へ下がりになつてゐる全市街や、悠然としてひろがった海面に

鏤ばめられた高價な蛋白石のやうに黠々として連なる島嶼が見渡された。

(……彼處には、いたつきもなく、悲しみも、憂ひもなく、窮みなき、永久の生命ぞ榮ゆなれ)……—かう、合唱隊が死者を慰めるもののやうに調子よく歌ふ。すると他の兵士たちはぼつかり口をあけた墓穴のぐるりを取りまいて折り重なりながら、無慙にも自分たちの手で押し殺してしまつた人間の靈の平安を心から祈つて、十字を切り、吐息を漏らすのであつた。

稍では、恰かも誰かが眼に見えぬ指で柔しく木の葉を掻き鳴らしでもするやうに、僅かにサラサラといふ音が聞こえ、地上の小石や緑閃石のやうな草の上には、陽光と鳩羽いろの蔭影とで織り出された世にも不思議な紋様が生けるもののやうにたゆたうてゐる。

合唱の指揮をしてゐるのは、クリコオフに苛酷な刑罰を宣告した判士の一人で、例の岩のやうに頑丈な男である。他の連中よりまるまる頭だけ背が高く、身幅も廣くて、宗教的な嚴肅さを具へ、この素晴らしい(日出づる)國に限なく漲がりわたる明朗な歡喜の中で實に陰鬱に見えるが、彼は一同を峻嚴な眼ざしで見やりながら、高びしやにかう指圖をする。

——祈禱、第八番!——(爾のみひとり不滅のものなれや……)

そして太い毛むくじやらかな両手を差しあげながら、まづ先きに立つて低いバスで歌ひはじめ。また合唱では歌へないやうな性質の祈りは、彼が祭司の役を買つて、自から祈禱書を眼の前に高

高とかざしながら、喇叭のやうな聲で高らかに讀みあげながら、死後には何も存在しない——言葉も、富も、すべてそれらはただ灰燼に過ぎないといふことを強調する……。

——(來たれ同胞、いざや與へん、死者に最後の接吻を……)——かう、鳶いろの剛毛に蔽はれた顔を蒼白にして、一種即成的な靈感に驅られた、その武骨で、もぞもぞした男のぎごちない低音が呼び招くやうに唸る。

死者の顔の覆ひが取られた——その顔は淨められてはゐたけれど、無慙に形を害はれて、忌はしい澁面に歪み、ぼかんと開けた口からは血精が流れ出してゐる。俘虜の多くは十字を切つて何か言葉を呟やきながら、名狀し難い恐怖に襲はれ、打ち拉がれたもののやうになつて、死者の額にそつと唇をつけるのであつた。

だが、ぐるりは何といふ多様鮮明な色彩であり、何といふ光輝と歡ばしさであらう! 精力絶倫な天日に孕まされた大地は限なく青葉と花の豪華な衣裳につつまれて、芳香を發散しながら有頂天になつてゐる。遠くの間々は透明な高みに聳えながら、紫いろの辰氣樓になつて、恰かも歡喜に顫いてゐるもののやうである。そよ風は木の葉をサラサラと鳴らして彼方へ吹き過ぎると、もう海に戯れて、その紺青の水面に樂しげな銀の小波を撒きちらすのである。

他の日本人たちにまじつて、その場には例の、クリコオフを群集から奪還した通譯がただずん



である。彼は物思はしげに、熱中せる歌聲に聴き入りながらも、墓穴が埋められたり、その上に大理石の墓標が立てられたり、百合と蓮の白い花でそれが綺麗に飾られたりする、その萬事が、信心ぶかい畏敬の念をもつて、恰かも今ここに葬られるのは一同にとつて親しい大切な肉身の者でもあるかのやうに、いとも嚴肅に取り行はれる有様を、皆のあがつた細い眼の黒目を光らせながら、綿密に見まもつてゐる。

彼には、この葬儀の費用の残りの金がクリコエフの遺族に送られることに決まつてゐる事實も分かつてゐた。つくづく驚嘆した彼は、自分の隣りにゐた初老の下士を振りかへつて、かう言つた。

——君たち露西亞人つて、どうも不可解な國民だねえ……。

——どうしてね？——と下士が訊き返す。

——君たちの良心はどうやら二重のやうだからさ。

——それあ當然のこと……さうよりありやうがねえでねえか？

——君たちは恐ろしく殘虐な人間かと思ふと實に善良なところもある。

——それあ、その通りでさあ。でなかつたら、一體どうなるだね？

最後にもう一度（永久の記念）が歌はれる、四邊を聳するばかりに全會集によつて歌はれる。

やがてその葬送曲は高調に達したところで中斷され、物悲しく消え去る。それに代つて今度は蟬の音楽が聞こえて来る。

葬式は終つた。十字を切つて帽子をかぶると、俘虜たちはもう、遙かに元氣な步調で、各自のバラックをさして戻つて行くのであつた——恰かも自分たちの怖ろしい罪の重荷は死人と一緒に墓穴へ埋めてしまつたとしてもいふやうに。

餘計者

奉天の會戦はいよいよ白熱して、最後の日には、その極點に達した。

N歩兵聯隊第二中隊の一兵卒、ガウリーラ・ウオドビヤーノフは、身幅のひろい背中を屈めて、少しでも弾丸をよけて身を匿すのに便利なやうに、鐵のショベルで小丘にせつせと穴を掘つてゐる。それは筋骨の逞ましい、岩疊な兵で、彼の長い胴體は、短かいが、つちりした兩脚に支へられてゐる。大きな鼻と鳶いろの眼をもつた腫んだ顔には、剛い亞麻いろの毛が生えてをり、濃い口髭は一文字に結んだ荒れた唇を蔽ひかくして、垂れさがつてゐる。

——ガウリーラ、なあ、ガウリーラ！——と、右側に肩をならべて土を掘つてゐた若い、面砲にきびづらの兵が、苦つばい歪んだやうな微笑わらひを浮かべて、彼の方へ顔をむけた。

——うゝ、何だい？——と、ウオドビヤーノフは隣りの兵の方へむいて訊きかへす。

——俺たちあ、墓穴を掘つてるんぢやねえのかなあ？

ウオドビヤーノフは、何を言つてるのだといはんばかりに、しばらくその面砲づらの兵をちつと見つめてから、むつつりとして答へた。

——餘計なことを言ふねえ……それでなくてさへ堪らねえのに、縁起でもねえことをゴテクサと……。

——それあ分かつてるけどさ……ただ何だか氣がすすまねえんで……。

ウオドビヤーノフは以前の姿勢にかへると、両手で土くれを掻きよせては、それを丘の上へと積みあげて、なるたけ己れの身の掩護を高く、堅固にした。その作業が一段落つくと、枯草にシヨベルを擦りつけて、革袋へ差しこんだ。それから膝立ちになつて、緊張した面持で四方を眺めにかかつた。正面、南の方角にささやかな小川の流れがあつて、その遙か彼方に敵軍が陣を布いてゐるのだ。左手には大きい山があつて、味方の軍勢によつて固められてゐる。右手は支那人の部落で、これも露軍に占められてゐる。四方八方で砲撃がつけられ、もう夕方なのに、戦ひは一向に休止されるどころか、ますます銃聲が間近に聞こえて来る。

——（今に俺たちも始めるのだ……）——さう考へると、ウオドビヤーノフは何か漠然たる不安に驅られて、思はず溜息を吐いた。鼠いろの外套の裾を吹きちぎるやうな突風が、ゾツと體ぢゆうに寒氣を浸みこませると共に、針で突き刺すやうに砂を顔に浴びせて眼潰しをくはせる。ガウリーラは眼を細めて、ポロポロになつた哥薩克帽をぐつと目深く引きさげて耳を蔽つた。

——燐寸あるかい？——と、フェルトの支那靴をはいた、頬骨の高い上等兵が、紙に捻つた烟草を手にしたまま、彼の方へ振りむいた。

——あるよ。

——一服やらうや。

ウオドビヤーノフは風に背中を向けて、自分に堀つた穴の中へどつかり坐ると、袖口から燐寸の箱を取りだして上等兵に渡した。上等兵はせつかちに、さも待ちきれなさうに首を伸ばして烟草を吸ひつける。二人の傍へ面砲づらの兵も近よつて来る。三人は寒さにブルブル震へながら、互ひにピツタリからだを擦りよせた。一本の捻り烟草を順番に喫みあふ。しばらくの間、物思はしげな、陰氣くさく押しつけられたやうな彼等は、黙つて坐つてゐた。

——ああ、今に日本兵の奴らめ、こちとらを酷い目に合はせやあがるぜ！——と、また面砲づらの兵が、誰の顔を見るでもなく、始めた。

——どうしてさ？——ウオドビヤーノフが顔をしかめて聞き咎める。

——だつて、もう右翼の後方へ迂回つたつて言ふでねえか。

何處からそんな噂が出たものか、そのことはまるで悪疫のやうな勢ひで、早朝からバツと四方にひろがつて、兵員の間不安と暗い豫感を生みつけてゐた。

——なあに、あべこべに俺らが彼奴らをやつつけるさ。——ウオドビヤーノフは自分で自分の

言葉に信の置けぬやうな、力なげな調子で反駁した。

——横つ腹で打つかつてゆかうつてえのか！——と、上等兵が口を入れた。——どうせ、何だぜ……奴らにやつつけられたら、最後の審判の日まで起きあがれつこねえんだぜ……。

低い聲で彼等は笑つたが、その押し殺された笑ひには心許ない哀愁の響きがこもり、さながら死の息吹のやうに、彼等の頭上を寒風が渡る。

——日本軍だ、日本軍だ！——さう言ふ誰かの怯えたやうな聲が聞こえて来る。

話し聲は一齊に中斷された。兵士たちは各々部署について懸命に働らきはじめる。銃を構へると、首を伸ばして待機の姿勢をとる。遙かに、灰いろの濛々たる砂塵の帷りを通して、まるで鼠いろの斑点のやうに、地面へへばりつくやうにして、日本兵が丘から丘へと駈け移る様子が見える。

——千二ひやあく！——と、後ろで元氣な大尉が敵の方へ双眼鏡をむけながら、號令をかける。初め間遠であつた射撃が、やがてだんだん激しくなつて来る。日本兵は一層目近く進出して、こちらへ雨霰と弾丸を浴せかける。猛烈な激戦になつた。弾丸は味方の頭の上でヒューツと泣くやうな音を立て、立木にあたつてバサツと鳴る。數分の後には、もう負傷兵の呻き聲が聞こえ出した。

ウオドビヤーノフは小丘の蔭に身を伏せて、続けざまに射撃した。砂塵が眼を晦まし、手が震き、心臓が激しく鼓動する。突然、弾丸が一發、彼の哥薩克帽を射貫いた。

——（こいつが頭に命中つたものなら、一遍にお陀佛だ……）——かう、ガウリーラは吐の中で思つた。そしてこの考へに、腦天の地肌がゾツとして、髪の毛が彌立つた。

戦線の前方、すぐ目近を、誰かの奔馬が物狂ほしく駈けてゆく。その左脇に、片足を鎧にひつかけたままの戦死者が逆様に地面を曳きずられてゐる。その馬に弾丸が命中つて、ウオドビヤーノフの處から三十間あまりの地上で轉倒した。馬は一生懸命に起きあがらうとして、無性に首を振つてゐたが、二分間ばかりすると、動かなくなり、騎者といつしよに野中に伸びてしまつた。風にその長い鬣が吹きなびいてゐる……。

——おお……おお……はやく抜いてくれ、抜いてくれ弾丸を……。

例の面砲づらの兵が急に飛びこんで来るなり、びよんびよん跳ねたり、ぐるぐる廻つたりして、まるで翼を捻ぢられた鳥のやうに矢鱈に長い兩腕を振りながら、泣き喚くのだった。彼はウオドビヤーノフの傍らへ、殆んど頭を並べるやうな鹽梅に仰向けに倒れた。そして、ゼイゼイ言ひながら、長いことアップ／＼口で息をしてゐたが、やがて事切れてしまつた。死體の下からは渾々と血が流れて、見る見る血潮の水溜りが出来た。

致命的な弾丸の雨がよいよ激しくなつた。新手を加へた日本軍が勇猛果敢に前進して来る。右手の隣接部落は砲火を浴びて炎々たる火災を起こした。風にあふられた火焰は猛り立つて家から家へと飛火する。低く棚びいた黒煙の中を幻影のやうに、雨霰と小銃や機關銃の弾丸を浴せかけられながら、露西亞兵が一散に退却する。中には足を掬はれたやうに、忽ち屍となつて倒れる者もあれば、長いあひだ死と闘ひながら、ブルブルと痙攣を起こしてゐる者もあり、また中には脚をやられて、頼りなげに四つんばひに這つてゆくものもある。今は負傷者を收容するところではない。餘りにも射撃が烈しいのである。

雷霆のやうな砲聲や、砲弾の炸裂や、無氣味な機關銃の顫音が四邊を聾してしまつた。ウオドピヤーノフにはもう、いつたい何處から何を目標に射撃が行はれてゐるのやら、さつぱり分からなくなつてしまつた。灰いろの塵煙が濛々と騰ちこめて、前年の高粱の枯葉や根が舞ひあがり、ヒュツ、ヒュツと風を切つて弾丸の飛ぶ眞下の、整然と畝のつけられた畠いちめんが、兇惡な秘密と不可思議な恐怖に充ち溢れてゐるやうに思はれた。ガウリーラは、戦死を遂げた仲間を見やつた。口をあいて、凝固した兩眼の瞳孔を恐ろしく擴げた面砲だらけの顔は蒼白め、形相が變つて、別人のやうになつてゐる……。

——おやおや、俺もこんな風になつて死ぬのかなあ？——と、彼は怖ろしさにギョツとして、肚の中で自から問ふのだつた。

第二中隊は半數あまりになつてしまつた。爾餘の者は或は戦死を遂げ、或は負傷してしまつたのである。例の元氣な大尉も疾に即死してゐた。青い眼鏡をかけた、白子で、きやしやな中尉は兵卒の掘つた後ろの塹壕の中へ身を匿してゐた。そこに見えてゐるのは、鞘を拂つた彼の軍刀だけである。それを振り動かしながら、彼は絲のやうに細い聲で喚くのだつた。

——やつつける、あの眇目の惡魔どもを！……正教の信仰のために、同胞たち！……信仰のために……。

腑抜けになつたやうな兵士たちは、矢鱈無性に見當もつけずに、あはてふためいて射撃をつづけた。

小丘の蔭に身を伏せたまま、ウオドピヤーノフも引つ切りなしに遊底をガチャガチャ打ち鳴らしながら、絶えず身に差し迫る死を待つてゐた。もう、どうせ同じことだ——少しも早く鼻がついた方がましだ。

突然、彼の左の肩胛骨の邊に何かガンと打つかつた。

——あッ！——と言ふなり、ウオドピヤーノフは急いでそこを手で押へた。

——やられたか？——彼とならんで、土を盛りあげた灌木の株を小盾に横になつてゐた、例の

頬骨の高い上等兵が訊ねた。

——やられた……。——と、痛さに口を歪めながらウォドビヤノフは答へた。

——繃帯所へ行け。

——射たれてしまふ……。

——這つていくんだ。

——どうせ助かりっこねえのだ。

——ええ、馬鹿な！

創は深くなささうだつたが、ウォドビヤノフは烈しい痛みを覺えた。血にグツシヨリ濡れたシャツが肌へばりついて氣味が悪い。不圖、彼は別れる時わが兒の言つた言葉を思ひ浮かべた。

——お父ちゃん、早く歸つて来てね……日本人のお頭を毆つてやつて、早く歸つて来てね……。射撃を止めた彼は小丘の蔭へ頭を匿して救ひを求めやうに大地にしつかり齧みついた。

一大隊の援軍が到着して、第二中隊の左翼に陣どつた。日本軍は一時後退して、射撃も間遠になつた。

——へこたれるでねえぞ、みんな、頑張れえッ！——と、髭武者の曹長が、牛の眼玉のやうな大きな眼の白目を異様にグルグル廻しながら、空元氣をつけて喚いた。

しかし沈靜は長くは續かなかつた。やがて何處からともなく榴弾が落下しはじめると、それが物凄く地面に炸裂して、榴散彈を兵に浴せかけ、次第々々に益々はげしく、兇暴に、猛烈な死の旋風が荒れ狂つた。

困憊しつくして、兵員は浮足になつた。つひには算を亂して潰走しはじめた。

銃を棄ててウォドビヤノフも一同と共に逃げだした。今はもう負傷の知覺もなく、ただ切なくて、眼の前がポーツとなつて、緑いろの波紋のやうなものがクルクル廻るだけである。敵は執念深く追撃して来る。兵員は次ぎ次ぎと彈丸にあたつて倒れる。

——ああ、助かることが出来さへしたら！——この唯ひとつの思ひがウォドビヤノフの頭の中に閃いた。

すぐ脇を騎兵が鳥のやうな速さで追ひ越して行く。ガウリーラは羨ましげにその後ろを見送つた。

數分の後、咽喉は引きつるやうに乾き、まるで大きな鑄鐵の分銅でも縛りつけられたやうに足が重くなつた。森へさしかかつた。とても我慢がなくなつて、ちよつと一息するため立ちどまる。夕方だ。空はたそがれて、さながら敗軍に遁げ路を教へるやうに風が立木の梢を北の方へ吹きなびかせながら、飄々と鳴つてゐる。立木の中には、砲彈のために幹を裂かれたものもある。

そこここに死んだ兵卒の屍や、小銃や、彈藥盒や、被服囊や、シヨベルが散らばつてゐる。一人の兵士が、帽子もなしに、顔をやられて、血達磨になつて、兩腕で木の幹につかまりながら歎願してゐる。

——きやうでい、助けてくれい！……

誰ひとり彼の傍に立ちどまる者はなかつた。みんな恐怖に包まれたまま駆け過ぎてしまふ。長い辨髪（びんぱつ）の支那人をチラと二人ほど見た。頭上からは曇つた空からでも降るもののやうに物々しい大砲の音が落ちて来る。どこか直ぐ間近で砲彈が炸裂した。身につけてゐた軍器を残らずかなくり棄てて、ウオドビヤーノフはなほも走りつづけた。と、再び彼は野原の中へ出た。

先きへ進めば進むほど、いよいよ彼のまはりには身を以つて遁れる人の群れがごつた返した。まるで意識も辨ぜぬほどだ。彼は呼吸（いき）をきらしたり、屍（しかばね）に躓（つまず）いて倒れたりしながらも、味方に取り残されることは嫌だつた。彼の目の前の、密集部隊の眞只中で砲彈が破裂した。一人の兵はパツと地面から跳ねあがりざま、齒を剥き出して彼の首つ玉へ飛びつくと、兩手でブルブルふるへながらしがみついたが、何か云はうとしたその兵の口からは、言葉のかはりに、熱い血潮がウオドビヤーノフの顔へ直かに遡（さか）つた……。

——放してくれ！——と、身を遁れようとしてガウリーラが喚（こゑ）いた。

しかしその刹那、彼等のそばへ、何か、足の下の大地が陥没（げんぼつ）でもしたやうに、激しく落下した物があつた。ウオドビヤーノフは妙に彈力のある力でドンと衝かれた、と同時に、全身數ヶ所に火傷をしたやうな知覺を感じるとともに、暗い奈落の底へ轉落して行くやうに思つた。

## 二

大齋期だ。五十戸ばかりのゴルバトフカの部落は、雪の蔽（か）ひから解放されて、はしやぎきつてゐた。藁（わら）ぶきの屋根からは、まるで飾りのやうに長い氷柱がさがつて、ポタリポタリと、時刻でもきざむやうに規則ただしく、銀いろの雫（しず）くが垂れてゐる。往還では元氣な喚（こゑ）き聲を立てながら子供たちが棒遊びに打ち興じてゐる。どこかの女房（かみさん）が井戸端で手桶へ水を汲んでゐる——釣瓶（つひん）がまるで油のきれた車輪のやうに軋（こ）む。蕎麥（そば）殻（がら）を積んだ大きな荷馬車（かまぐるま）が通つてゆく。蹄鐵（てつてつ）の打つてない蹄（ひづめ）が滑つて、馬は坂道をのぼり悩む。百姓が馬車に肩を掛けて、ウンと氣張りながら大聲で呶（な）鳴る。

——それ曳（ひ）け、獄道（ごくどう）！ そら、この野郎（やろう）！……

そこそこで牝牛（めづ）が日向ぼつこをしてゐる。瘦せて、毛のモヂヤモヂヤした牝牛（めづ）どもは、氣懶（けだる）さうに首を垂れて、陽映（やうえい）しに眼を細めながら、夢見るやうに反芻（はんそう）をつづけてゐる。



ウ・ドビヤノフの二人の兄が家の傍で薪を挽いてゐる。長兄のトゥリフォンはひよろ長い猫背の百姓で、登相な頤髯を垂らして、臺木の上へ疊尺のやうな恰好で屈んでゐる。次兄のサヂシカは矮軀の癖にのつそりとした男で、西瓜のやうにまん圓な顔をして、左足を前方へウンと踏んばつて突立つてゐる。どちらも古い半外套を着て、ポロポロになつた毛編の帽子をかぶつてゐる。彼等は向かひあつて双方から鋸を力いっぱい動かしてゐるのだ。そして、その一挽きごとに鋼鐵の齒がザーツ、ザーツと音を立てる……。

家の中からフロシカが出て来る。赤い頬へたの、健康さうな若い女房で、人を誘ふやうな黒味がちな眼と、恐ろしく仰むいた鼻の持主だ。羅紗地の外套を羽織つて、頸には緑や青の玉をつけてゐる。これは末弟ガウリーラの妻なのだ。

——大兄さん、あんた、村有の種牛を連れに行つて來たら何うを？——と、彼女は狡さうに眼を細めて、上の義兄に言つた。

——何うして？——と、鋸の手を休めてトゥリフォンが訊く。

——だつて、あそこを御覽なよ、茶毛のしてをることを……。

——おや、ほんになあ……。これあ放つちやあおけねえぞ……。

——フロシカ、お前まえにあ誰を連れて來てやつたらよかんべえなあ……うんと威勢のええ奴でな

くつちやなあ……。——さう言つて、サヂシカがにやにや笑ふ。

——何を變な笑ひかたをすんのさ、意地悪な小兄さんつたら？——フロシカはブリブリする。

若い男が杖をついてやつて來る。

——御精が出るだね！——彼は會釋をして、さう言ふ。

——有難う。——と兄弟は同時に答へる。

——誰かひとり、會所へ行つて貰いてえんで。

——何の用だい？——と、トゥリフォンが訊きかへす。

——それを俺が知るもんけえ。區長さんが呼んでるだよ。

トゥリフォンは額に皺を寄せて、何の用で會所へ出むかなければならぬのだらうと、推測に迷つた。

——何を愚圖ついでるだよ？——とサヂシカが兄にむかつて言ふ。——呼ばれとるだら、出かけて見たらよかんべえに。

長兄が出かけて行くと、フロシカが代つてサヂシカを相手に仕事をはじめた。鋸は再び腹立たしさうな音をたてにかかり、臺木からは次ぎ次ぎに切丸太が挽き落された。

隣りの百姓家から家鳩の大群が舞ひあがつて、偵察でもするやうに庭の上を一周すると、穀乾

場の方へ飛び去つた。白揚の木にとまつた鳥が首をのぼして、ユラリユラリ揺れながら、嘔がれ  
 聲で鳴いてゐる。斑の剛毛の豚が體を曲げてゲーゲー鳴きながら、懶さうに小屋の角で脇腹をこ  
 すつてゐる。ボロボロの服装をした年寄りの乞食に黒犬が吠えつく。乞食は杖を振りまはしなが  
 ら後退りする。往還の彼方側では百姓たちが新らしい黄いろな薬で屋根の葺きかへをしてゐる。  
 半時間ほどすると、トゥリフォンが顔いろを變へて、しよげ返つて戻つて來た。

——家んなかさ入るべえ……話があるだ。——と、彼は弟とフロシカを呼んだ。

古ぼけた、煙突のない家の中は、乞食小屋のやうに貧しかつた。ひん曲つた壁は分厚な煤の層  
 で覆はれてゐた。床板には黒い穴が明いてゐた。梁が今にも折れさうに曲つて、僅かに樫の支柱  
 でささへられてゐた。一方の隅には、殆んど家の四分の一を占めて、ペチカが頑張つてをり、他  
 方には幅のひろい寢棚が取りつけてあつた。後ろの腰掛に沿ふて揺籃が二つ釣つてあり、その一  
 つの上へサヂシカの妻が屈みこんでゐる。彼女は萎びた乳房を嬰兒に含ませてゐるのである。上  
 の兄嫂は勞苦にさいなまれた黄ばんだ顔の年増女で、腰掛にかけて苧を績んでゐる。床の上では  
 子供たちが喧ましく騒ぎ立ててゐる。家の中ちゆうがゴタゴタして、汚ならしくて、むつとする  
 やうである。

トゥリフォンは家へ入ると、闕ぎはに立ち停つて、ホーツと深く溜息をついて、頭を一つ振つ

てから、話しだした。

——話つてえなあ、かうなんだ……。

女たちや子供らまでが彼のまはりに集つて、心配さうにその顔を覗きこんだ。

——さあ、早く話しなよ。いつてえ何うしたつてんだい？——と、首をかき上げて、サヂシカが  
 訊ねる。

——區長が、通知書をおらに讀んで聽かせただよ……何だとよ……ガウリユーラは戦死しただ  
 とよ……。

——戦死しただつて！——鸚鵡がへしにさう口走ると、フロシカは、テーブルの脇の腰掛へ崩  
 折れた。彼女の胸元で強く何かかでんぐりかへりを打つた。一分間ばかり彼女は物問ひたげに眉  
 を釣りあげて、まるで誰かに腦天を斧の背中で殴りつけられでもしたやうに、ポカンと口を開け  
 たまま、死人のやうな顔で、身じろぎ一つしないで坐つてゐた。それから魯かしく何か呟やき出  
 すと同時に、からだ中を顫はせながら、熱い涙をハラハラと零して泣きはじめた。

家の中は女や子供の泣き聲で充たされた。トゥリフォンは側柱に凭れ、首うなだれて、音もな  
 く唇を動かしながら、袖で涙を拭き拭き立つてゐた。サヂシカは寢棚に腰かけ、脊を圓くして、  
 まるで誰かに頭で衝つかかつて行かうとでもするやうに、一方を窺つてゐた。彼の妻が急いで神

棚に蠟燭をつけた。老病の父親はベチカの上から頭を差しのぞけて、どんよりした眼で氣づかほしさうに、泣いてゐる家の者の顔をしげしげと眺める。その瘦せて皺だらけの顔には疑惑の色が漂つてゐる。

——何ぞよくねえこんでも出来ただかの？——と、弱々しい老人じみた聲で訊ねる。

トゥリフォンが老父の方へ歩み寄ると、階段の上に立つて、長いことかかつて、その耳もとで譯を話した。

——さうか、さうか、戦死をしただちふだのう……。たうとう俺は愛しい彼に會へなかつたのう……。なあに、もう直き神様があの世で會はせてくらつせるわい……。

老人の兩眼は濁つた涙にうるんだ。彼は頭をもたげて十字を切ると、神棚のある隅つこを見ながら、傷ましげに呟やいた。

——主よ、あなたの僕べに天國を惠ませ給へ……。

そして咳き入りながら、また自分の寢場所へ横になつた。

フロシカには二人の子供があつた。イリュューシャは五つで、アニユートカは二つだつた。彼女はわが子を兩傍へ抱き寄せて、泣きながら言ひきかせるのだつた。

——坊や達や、可愛い、いとしい坊や達や、悲しい身の上の母ちゃんは何うしてこの先きお前

たちを育てて行けやうね、もうお前たちには、父ちゃんが無いんだよ。生みの恩人が無くなつてしまつただよ……。お前たちは、寄るべない孤兒になつてしまつただよ……。ほんに妾は、ただ苦勞をさせるだけにお前たちを生んだやうなものだわねえ……。

母の言葉がわかりでもするやうに、ふたりの幼兒は口を歪め、顔を顰めて、ありつたけの聲を絞つて泣くのだつた。

フロシカは後ろへふんぞり返ると、手をボンと拍つて、まるで彈丸にでも當つたやうにジタバタと全身をもがき出した。眼の前のすべてがボーツとなつて何も見えず、胸の中が疼くやうに痛む。取り亂した彼女は頭の頭巾を脱ぎ棄てて我れと我が黒髪を引き搥つた。駈けつけた隣り近所の人達と一緒にトゥリフォンがそれを宥めるのだつた。我れに返ると彼女はテーブルの端に打つ伏して、睨りあげながら、訴へるが如く掻き口説くのだつた。

——愛し懐かしいガウリルーシカ……。男らしい……。鷹のやうな頼もしいお前さん！ 妾やもう直き會へることと夜晝あなたを待つて待つて待ち焦れてゐただのに、それだのに意地の悪い運命がもう永久に妾とお前さんとを引き離してしまつただ……。鋭いサーベルがあんたの首を斬りさいなみ、彈丸の畜生があんたの優しい胸を打ち抜いただねえ……。戀しい戀しいあんたは、異國の冷たい土の上に横たはつてゐなさるだねえ……。

家の中にゐた全ての人々には、正しくガウリーラは死んでしまつたものと思はれた。誰の胸もゾツとして不気味な思ひに塞された。みんなは泣きながら、何かぼそぼそと喋つてゐる。上の嫂はからだを圓くして窓ぎはに坐つたまま、涙をボタリボタリ床へこぼしながら、溜息をついた。

——これでもう、うちの温なしい弟は亡くなつてしまつただねえ……。ほんとに善い人で、極もの静かな、親切な人だつただが……。

それから、何か急に思ひ出したやうに、腹立たしさうに、自分の娘にむかつて呶鳴りつけた。

——グルーニカ！ 何べんお主に言つたらええだよ。ワシリーサ婆さんのとこさ行つて、毛糸を貰つて来うといふだに、お主つたら、尻尾のない鷓みてえに、そこで何を愚圖々々してゐ腐るだか！……。

小娘は逸はやく往來へ飛び出して行つた。そこで母親は首を傾げて、片手で頤杖をつきながら、再び泣きはじめるのだつた。

家の中へは、後から後からと近所の者がやつて来ては、いろいろと問ひ訊して、ガウリーラの魂の平安のために十字を切つた。フロシカは泣き腫らした顔をあげて、人々の方へ向きなほつて歡願するのだつた。

——ああ、どうかねえ、御親切なお隣りの衆！ 寄るべない後家のわたしと不合せな小さい子供とを見棄てないで下さいな。可愛さうなこの孤兒たちが世間をさまよつた擧句、皆さんのところへお慈悲を願ひにあがつて、飢ゑに泣き寒さに震へながら、窓の戸を叩くやうなことがありましたら、温かいお家の中へでも入れて、あたためて、可愛がつて、何彼と教へてやつてお呉んなさいな……。

小柄で瘦せた、鳥の嘴のやうに尖つた鼻の、隣りの老婆がフロシカの肩を叩きながら、しんみりと、それに答へるのだつた。

——まあさ、お前さん、泣くのはお止しよ、氣の毒な新後家さん。なあに、そんなに歎くことあないだよ不合せなお母さん。そんなにしてガウリーラの魂を苦しめなざるでねえだよ。あんなの泣くのを聞いては佛さまもさぞ辛かんべえに……。何もお前さん一人がこの世で不運な譯でもねえだよ。なあに後家の手にだつて、子供は丈夫に育つものだからよ。

しかし、フロシカを宥めることは難かしかつた。彼女にとつては今は最早この世に何の喜びもなく、何も彼もおしまひで、もう誰ひとり、誰ひとり自分を慰めてくれる者もなければ、何ひとつ自分の悲しみを消してくれるものもないやうに思はれるのだつた。

髪ふり亂した頭をテーブルの上へ落したまま、なほも彼女は痛々しく掻き口説くのだつた。

傷ついた悼ましい胸の奥底からは獨自な言葉が生まれて、ひとりでに悲しい挽歌になるのであつた。

——ガウリーク、ガウリーク！……誰を目あてにあんたはこのわたしと子供たちを残して逝つてしまつたの？ この先きわたしは誰といつしよに、しつかりした分別を考へ、誰に相談をして誰と共に無道な悲しみを拂ひのけたらいいの？ 誰の胸にわたしは大きな希望を見つけたらいいの？ 何をする暇もなく妾の若さは過ぎ去り、薄命なわたしは、まだそんな齡でもないのに老けてしまふ……。ああ、ガウリーク、ガウリーク！……あんたはもう、二度とわたしたちの家へはその敏捷い足で歸つて來ないのね、笑ひもしなければ、優しい言葉もかけては呉れないのね……。秋の雨よ、うちの良人の骨をよく洗つておくれ。そして、あの美しいお天道さま、どうぞそれを乾かして下さい。それから、慕はしい母なる大地よ、最後の審判の日までそれを大切にしまつておいておくれ！……。

太陽の斜光が汚れた硝子をとほしてフロシカの項垂れた頭へ落ちて、晴れやかな愛撫をもつて、その顔をさし覗かうとする。けれど彼女はそれにも氣づかずに、悪寒でもするやうに、からだをすくめて、震へながら、なほも泣きつづける……。

## 三

今し日本の都會の上空を、暖かい饒かな雨を齎らして夕立雲が通りすぎると、再び高い青空は明るくなつた。燃えるやうな初夏の太陽はいよいよ高くなり、その光りはますます鮮やかに輝やく——それは恰かも、夕立の間ぢゆう休息してゐたので、今や空費した時間の埋め合せをしようといつた鹽梅である。丘陵の起伏した山懐ろには、園や森のあひだあひだに互ひにピツタリと寄り添ふやうに、瓦葺きの赤い切妻を戴いた木造の平家が、燦々たる光りの中にクツキリと浮き出してゐる。一筋の河が市街を大小二つの部分に兩斷して、ところどころで柔かい雪白の水泡をあげ、岩の瀬で高らかに水音を立てながら、廣い、曲りくねつた、銀のやうに輝やく一條の帯となつて、遙か彼方へと流れてゐる。歩道の濁つた水溜りに映つた太陽が金色の彩光をみなぎらせてユラユラと動いてゐる。塵といふ塵が雨のために地面へ叩き落されてしまひ、空氣は透きとほつて、いかにも爽々しい。大戸をあけひろげた家々の中には殆んど人影もなく、その代りに戶外で生活が沸きたつてゐる。こちらに、腕をむきだした女たちが大聲で話しあひながら下著の洗濯をしてゐるかと思へば、あちらでは、小さな床机に坐つて編みものをしたり刺繡をしてゐる。男達は毛筆を使つて巻紙に手紙を書いたり、玩具を拵らへたり、籠を編んだりしてゐる。到るところで

まるで火花のやうに、子供たちの嬉々とした聲が交錯してゐる。男は紺か鼠いろの着物をまとひ女はブラブラする廣い袖の、派手な着物にいろいろの色彩の幅の廣い帯を緊め、背中に大きな結び目をしよつて、歩道の石に背の高い下駄をカラコロと鳴らしながら通つて行く。店舗の窓や戸口には商品が堆うづたかく、きらびやかに積まれ、顧客が喧かしましく品さだめをしてゐる。朗らかな初夏の日は、どこもかしこも活氣があり、華やかである。

青黒い雨雲は渦をまきながら、靜かに、遙か彼方に巍然として聳え立つ連山の方へ遠ざかつて行く。

園にとりまかれた假病舎の障子はあけ放たれてゐた。爽々しい、雨後の匂やかな外氣が、重苦しい薬品の臭ひを吹き拂ひながら、舎内へ流れこんで来る。比較的元氣のいい患者たちが窓ぎはに立つて、和やかな日和に見惚れてゐる。

露西亞兵には特別の病室があてがはれてゐた。釣床の一つに、脇腹を下に、頭を窓の方へ寄せ、日本の病衣を着た兵士が一人寝てゐる。左肩へ捻ぢ向けられた彼の顔は斜はすに白い繃帯が巻かれて、鼻と口と、片方の頬全體がかくされてゐる。ただ見えてゐるのは、天井を睨んだ左の眼と、亞麻いろの剛毛に覆はれた顴骨だけである。口の上の繃帯には、呼吸のために小さい孔が明けてある。枕の下から、伏せた本が覗いてゐる。病人はあたりには眼も向けなくて、考へこんでゐる。

さつきの雷鳴が、彼に最後の戦鬪の日を想ひ起こさせたのである。

——えい、畜生！——と、背筋にゾツと氷のやうな寒けを覚えながら病人は口走つた。彼は少し體を起こすと、顔を斜はすにして、ながいあひだ、膝から下を切斷された左脚を見つめながら、何のためか手で觸つてみるのだつた。

——どうしたい、ガウリーラ？——と、通りすがりに、他の病兵が訊ねた。

——なあに……。相變らずさ……。——

ウオドピヤーノフは隻眼でむつつりと病室を見まはしながら、仰向けに寝た。

隣りの釣床には、脚を下へ垂れてブラブラ揺りながら、一人の兵が坐つてゐる。この男は頭蓋骨をやられて腦に異狀を來してゐるのである。彼は繃帯した頭をうつむけて、どんよりした眼で床のまを見つめながら、何かを一心に理解のみにまうとするやうに、大きな黒い口をムニヤムニヤ言はせて、鬚だらけの裏れた顔に皺を寄せてゐる。

——ちえッ！……まるで腐れ肉も同然だ……。——ベツと唾を吐いて、頭をグルグルまはしながら、さう言ふと、彼は再び口をムニヤムニヤやり出した。

そのむかうには、まだ近頃、片腕を肩の付根から切斷されて、極度に衰弱した一人の歩兵が寝てゐる。彼は訴へるやうにかう呻くのだつた。

——あ、ああ……とても堪らん……神様、いつそ死んだ方が……あ、あ、あ……。

その聲が如何にも苦しうなので、ウォドピヤーノフは思はず身顫ひをするのだつた。

一方、窓ぎには、不具にはなつたけれど餘ほど快癒した兵士の一團がただづんでゐて、その中には二人の日本兵も交つてゐる。露西亞兵が日本兵に猥褻な文句を熱心に教へてゐる。そして日本兵たちが、廻らぬ舌で汚ら<sup>が</sup>はしい言葉を發音するたんびに、故意とらしい不健全な笑ひ聲がドツと揚つた。むかうの隅では、丸太ん棒のやうに兩脚とも無い砲手が、自分で歌をこしらへて腹がれ聲を張りあげて唄つてゐる。

さても俺らは見上げた軍人、

東洋の猿のお見舞ひに

胡椒と鹽と拳骨もらひ、

おまけに足蹴を喰はされた……。

兩眼をやられた、背の高い、瘦せた狙撃兵は病舎の壁に凭れて、彫像のやうに身じろぎもせず立つてゐる。彼はこの病室内の不自然な生活に耳を傾けるでもなければ、何を考へてゐるでもない。釣床の一つには、騎兵がひとり死に瀕してゐる。斷末魔で、ゼイゼイ咽喉<sup>のど</sup>を鳴らしたり、吃逆<sup>しつくり</sup>をしたり、ひどい痙攣に海老のやうに體を曲げたりする。それに對して誰ひとり注意を向け

る者もなければ、心を配る者もない。みんな馴れつこになつてしまつてゐるのだ。傍に付添つてゐるのは、奇妙な白帽をかぶつた、細い黒い眼の、うら若い身ぎれいな日本娘がたゞ一人きりだ。それは病兵一同のお氣に入りの看護婦で、すべての病兵に對して、まるで我が子に對する善良な母のやうに親切なナミさんである。彼女は憂はしげに瀕死の人を見まもりながら、時々、枕をなほしてやつたり、シーツを掛けてやつたりする。

耳をなくした、背が低くて、まるで白のやうに圓まつちい、痘痕<sup>あざ</sup>づらの兵が日本娘をチラと見ながら、舌なめずりをするやうにして言つた。

——てへッ、あの日本娘の味が見てやりてえ！……

そして彼は、破廉恥な身振りをして、自分の氣持を如實に補足するのだつた。

——黙れ、悪黨！——と、誰かが彼を罵る。——さもないと、その痘痕づらに井鉢をぶつつけるぞッ……。

ガウリーラ・ウォドピヤーノフは、もう數ヶ月の間、自分でも苦しみながら、他人の苦しみを見たり、彼等の呻吟や呪咀や、聞くも忌はしい罵詈雑言を耳にして、この病舎に過してゐるのである。辛く、懶く、何の好いことも約束しない時がダラダラと續く。前途には——以前の生活のかはりに——眞暗な空虚が口をあけて待つてゐる。時には、すべてに無關心になつて、丸太のやうに何

の感情も思想もなく釣床に横たはつてゐるが、不意に激しい苦惱に胸を衝かれると、満足な片眼から不覺にも涙が滂沱として流れるのだ。さういふ時には、無暗に大聲を揚げて喚くか、野獸のやうに吼えるか、どこかへ矢鱈無性に駈け出したいやうな衝動に駈られる。けれど、彼は嬰兒のやうに頼りない體で、寢がへり一つ打つにも思ふにまかせぬのである。

隣りの病室から、彼と同じ中隊の兵で、美しい玉子型の顔をしたセミョーノフがやつて來た。彼は鎖骨をやられて、一方の肩が片方より下つてゐるが、もう今では殆んど快癒したので、間もなく退院しなければならぬのだ。

——眠つてるんぢやないかい？——と、セミョーノフはウオドピヤーノフの釣床の端に腰かけながら、訊ねる。

——うん。——と、こちらは仲間の方を見るために、力ない體をまはしながら、繻帶の間から返事をする。

——どんな鹽梅だい？

ガウリーラは望みなげに手を振つた。

——俺は變な目にあつたよ……。——と、明るい空いろの眼で同僚を眺めながらセミョーノフが話し出した。——朝、釣床に寢てたんだよ……。不圖みると、日本兵がひとり俺の方へやつて

來るんだ。その男の脚は振ちれてゐて、ひどく跛をひくんだ。顔は創痕だらけなんだよ。それが俺の胸へすがりついて、オイオイと泣き出しをるのさ。からだを顫はせて、何か自分の國の言葉でくどくど呟やくのだ……。長いことさうしてゐるのさ。随分、俺あびつくりしちやつたよ。この先生、氣が狂つたのかなと思つたが、そのうちに看護卒が何處かへ連れて行つたがね……。いつたい何うしたつてんだらうなあ、その男は？

——わからねえなあ。——と、ウオドピヤーノフは両手で胸をおさへて、弱々しく咳き入りながら、答へた。

——うん……。それがさ……。まるで詫びをしてるつてえ形なのさ……。

すこし考へてから、セミョーノフは言ひ足すのだつた。

——日本兵は俺たちと仲が良いんだ……。時々、彼等を見ながら思ふことだが、いつたい何うして俺たちは……？ 何のために？

——此處では屹度みんなさう思つてるんだよ……。だが、あちらの、戦地では？……

セミョーノフは立ちあがつて、窓に近よつた。

——戸外はとても好いなあ！

ガウリーラは両手をついて、そろそろと起きあがると達者な方の脚の膝を曲げて、他の脚——



棒の義足——に病衣の裾をかけながら、枕の上へ腰かけた。彼は顔がそちらへ振ぢれてゐる左肩を窓の方へ向けて、戸外を眺める。

静かな、暖かく晴れた日だ。高く和やかな大空は青々と澄みわたり、窓の前には、春の歡ばしい生活のあらゆる色彩に光り輝やく、新緑の庭が雨に洗はれて一際すがすがしく、五彩燦爛たる波濤の如く氾濫してゐる。右手には、まだ森閑とした往還が見えてゐる。たいていの家には小さい前栽があつて、その垣根に蔓性植物がしなやかに絡みついてゐる。左手の遙か彼方に竹藪がある。竹の幹は細く、すんなりと蠟燭のやうに長く伸びて、上の方に、羽根のやうな新緑の葉を飾つてゐる。それと並んで、女性的な木蓮の花があでやかに咲いてゐる。栗の木が隊列のやうに病院の垣根沿ひに並んで、その豊かな枝を廣々と、傍若無人にひろげてゐる。が、それよりも一層高くすつきりとした松の木が、稍越しに遠方を眺めてゐる。庭の中央には、さも自分の姿を見せびらかすやうに、美しい棕櫚の樹が二本立つてゐる。暗緑の絲杉はおおおと枝を幹にすぼめるやうにして、つましく片隅にひかへてゐる。すべての樹木が穩やかで、まるで祈りでも捧げてゐるやうに神妙だ。枝ひとつ揺れず、木の葉一枚うごかぬ。下の、柔かい地面には、眞紅な茨が盃のやうな花をつけてをり、日本人にお氣に入りの菊の株があり、花冠のほころびた、鮮血のやうに眞紅なチウリップや、その他多くの、鮮やかな、優しい花がある。春の愛撫に接吻された花たちは、互ひに妍を誇り、美を競ふてゐる。そして、これらのすべてが暖かい陽映しを浴びて、寶石のやうな大粒な露を宿してゐる。また郊外の遙か彼方には、青空を背景にして、薄紫の色調を帯びた山脈が、奔放なジクザクを仄かに描いてゐる……。

さうだ、晴れやかな、暖かい、静かな還境だ。心臓のすべて、血管の全體に、再び人の世に返り來つた春の嚴かな生命が感じられ、青空にも日の光りにも匂やかな空氣にも明るい土の色にも漲りわたつた歡喜に、人々の心は強く惹きよせられる。

春の日の法悦がセミヨノフをつつみ、あたたため、愛撫する。彼は微笑しながら言ふ。

——なあ、どうでえ、ガウリーラ？

——うん、悪くねえさ。だが、やつぱり故國の方がいいぜ。——ウオドピヤノフは左の眼を響めながら、さう答へた。

——それあ又どうしてさ？ だつて、故國にやあこんな草木はねえんだぜ。

——その代りに森がいくらでもあらあな……。それこそ、行けども行けども果てしのねえ森がよ……。俺あ白樺が大好きなんだが……。こちらにやあいつたい何處に白樺があるんだい？

——それあまつたくだ——白樺はこちらにやあねえなあ。それに他の木にしても、いはば二の次ぎものばかりさ。しかし、それでも、きやうでえ、やつぱり美しいや。

二人は一瞬間おし黙つて、めいめい別々のことを心に描いてゐた。

——俺らの村に（ワーシカの泉）つてえのがあるんだ。——と、靜かに、生れ故郷のことを想ひだしながら、ウォドピヤーノフが言ふのだつた。——素晴らしい泉さ。その水といつたら水晶みてえに綺麗なんだぜ。今あの泉の傍に寝ころぶことが出来たらなあ……。

セミヨノフはそれを聴かうともせず、有頂天になつて叫び出す。

——ううん、まあ見ろよ——何て、あの山は素敵だらう！ ああ、それに随分おほきな山だ！ あの山の上へ登つたら、きつと遠くが見晴らせるだらうなあ！……

ガウリーラはほつと深い吐息をついた。

往還を背中に赤ん坊をおんぶした小娘があはただしく駆けて行く。それを、紺のシャツに黄いろの大きな鞆のやうな帽子をかぶつた、小柄で、身軽なりキシヤが追ひ越して行く。そのリキシヤには商人に違ひない肥つた一人の紳士が乗つてゐる。その反対側から、紙の傘をさして、奇妙な鬘に結つた日本娘の看護婦がやつて来る。その後ろから、蓑を著た恰好がヤマアラシそつくりの日本人が、からだを振り振り歩いて来る。庭の小徑には、露兵と日本兵とが、相向ひに坐つて煙管をくはへながら、何やら穩やかに手眞似をして話しあつてゐる。彼等の頭上には青い煙が渦まいてゐる。

——あゝあ、今頃、村では何をしてる頃かなあ？——とセミヨノフが訊ねる。

——亞麻を蒔く時分だよ。

——はやく平和になつたらなあ……。

——こころは痛くも愁へ煩ふ……。

セミヨノフの眼には哀愁の色が漂ふ。彼は片方の肩を低くさげて、靜かに出て行つた。ウォドピヤーノフは微かに身を屈めて、鳶いろの眼で山の顛きを見つめたまま物思ひに沈む。着物の襟がはだけて、黒い毛の生へた、げつそりして肋骨のクツキリ見える胸が露はれてゐる。彼のところは故郷の空へ飛んで、懐かしい野原や、谷間や、森をさまよつてゐるのだ。知つた人々にも出あふ。髯の白い、頭の禿げた父が、草を一掴み搥り取つて、ニッコリしながら言ふのだ。

——よう肥えとる……。乾草がたとと出来るわい、乾草がどれだけ出来ることだか！……

そして、まるでもう草刈りの指圖をしてゐるやうだ。

ガウリーラは父の言葉を聴いて、ほうつと溜息をつく。

そこで突然われに返つた……。いやいや、最早あの東雲の空一帯が紫紅の色に彩られる朝まだき、彼が露ふかい草地へ出ることもなければ、その逞ましい手に握られた大鎌が、むかしのやうにザクザクと音を立てることもないのだ……。

——不具者……一塊の肉だ……何の役にも立てぬ廢れ者だ……。

胸の底で堪え難い苦痛がうづき始める。ガウリーラは我れにもなく兩の手を握りしめる……。

——もうお仕舞ひだ、何もかもがおしまひになつてしまつた、何の理由もなしに！……。

情け容赦もない苦い想ひが燃え立つて盡くるところを知らぬ……。

病舎の中で、ガヤガヤいふ騒ぎ聲と日本語が聞こえる。ウオドピヤーノフは用心にも用心をして左脇で後ろを振り返る。たうとう騎兵が息を引きとつたのだ。看護卒が死骸を擔架に載せて病舎から運び出して行く。釣床が一つ空いて、また新しく来る戦争の犠牲者を待つことになる。ぐりでは、宿命にさいなまれて生れもつかぬ不具の身となつて、最早この世の何の役にも立たなくなつた連中が深い思ひに沈んでゐる。誰かが讒言で母親を呼んでゐる。隣りの男は口をムニヤムニヤ言はせたり、顔を盪めたり、唾を吐きとばしたりしてゐる。病室の中を盲らの兵が兩手を前へ差し出して、そろそろと音もなく通りぬける。片隅から、運命を豫言するやうに、激した歌の一節が聞こえて来る。

………

——(ほんとにさうだ……)——ガウリーラは壓しつけられるやうに、さう呟やいた。そして後

ろむきになつて、再び窓の外を見つめるのだつた。無邊際の青空からは豊かに暖かな陽光が落ちて、どんな小さな叢らから、どんな眼にも留らぬ植物の端くれに至るまで、温め、愛撫するものやうに、鬱蒼たる樹々の枝をとほして黄金こがねいろの光りが燦々と降り灑いでゐる。この熱と光りとを惠むものに對する限りなき感動と感謝の祈りに、温良可憐な花の顔は充ち溢れてゐる。彼等の祈り、生命に對し、太陽に對し、地に對する彼等の祈りは、さはやかな香氣となつて流動してゐる……。

まるで酔ひしれた者のやうに、ガウリーラは我れを忘れてしまひ、またしてもその心は故郷の空を翔つてゐるのだつた。いつも善良で慇懃な妻の顔、わが兒アニュートカやイリユーシヤの面影が眼前に浮かぶ。男の子のイリユーシヤは大きくなつて、まるで雀のやうに元氣だ。

——字じ々を教へてよ……。——と兩の手をひろげて、眞面目くさつた顔で言ふ。

——ようし、坊や、ここへおいで……。

子供は大悦びで父に擦りよつて来る……。

長い間ガウリーラはそんな風な空想に耽つてゐた。だが、ふと我れに返ると、冷たい戦慄が彼の全身を走つた。

——俺は片輪だ……醜い片輪だ……。——さう彼は、兩手で頭をおさへながら呟やくのだつた。

—ああ、フロシカ、フロシカ……お前が若し、今の俺がどんな者になつてしまつたかを知つたなら……。

まるで誰か大きな重い人が乗しかかつて來たやうに、彼は何ものかに壓迫された。眼の中が青く眩み、手が力なく落ちる。何時しか枕の上からずりおりと、靜かに、辱められた子供のやうに、彼はおいおいと泣きだした。

—ああほんとに、どうなることだらう？……

何か辻褃のあはぬ、夜のやうに暗い影が眼の前に浮かびあがつて、氷のやうな冷たい息を吹きかけた。ガウリーラは怖ろしさにゾツと震へながら、泣きつづけた……。

## 四

露西亞の春は今や闌である。澄みわたつた天は明るい空いろの圓蓋となつて大地の上にかかつてゐる。ただ三つ四つ、奇妙な捲毛の形をした、海の水泡のやうに白い斷雲が、靜かに、また親しげに寄り添ふかと思へば、また離れて、互ひに見かはすやうにしなから青い大空を流れてゆく。太陽は煌々として輝やき、生命の源泉なる光りを惜みなく、廣々とした春蒔の野良いつばいに降り灑ぎ、地上には何か母性的な創造が感じられる。一莖の草、一輪の花までが、困憊せる上空へ來る。

フロシカは腰を屈めて、手まめに稷畠の雜草を掻り取つてゐる。彼女は古びて色の褪せたサラファンに、麻の肌著を着て、頭には黒つぽい頭巾をかぶつてゐるが、その下から剛い絲のやうな黒髪がはみ出してゐる。丸々とした素足の腓が白々として見える。時々、彼女は疲れた腰をのびしては、物思はしげな眼眸で水晶のやうな遠方を眺める。フロシカの顔はげつそり瘦せて、陰鬱な影に重々しく翳され、眉がきつく釣りあがつてゐる。周圍のすべてがこんなに朗らかで、明るく、春の日の漲り溢るるやうな光りに溺れて、あらゆるものに伸びゆく生命の奔放な躍動の感じられる今も、彼女のこころは晴れなかつた。良人の身の上に就いて、あの怖ろしい報せを受けた日この方、彼女は夜の眼もあはず、われと我が身の置きどころも知らずに、亡靈のやうに彷徨ひまはるのだつた……。

野良には、あちこちに腰を屈めた他の女たちの姿も見える。二三枚、畑を距てて一人の百姓が時々、連錢葦毛の牝馬に親しげに叫び聲を浴せながら、馬鈴薯畠を耕やしてゐる。フロシカの傍

らには、瘦せぎすで、はしつこいイリュウシヤが、シャツと股引だけで空地で喋々を追ひまはしたり、花を摘みとつたりして遊んでゐる。彼には素晴らしく氣持がよくて愉快なのだ。そして何もかもが彼の心を惹きつけ、一から十まで質問の矢を放たずにはおけないのだつた。

—お母ちゃん、お覽よ、とんび!

—どれ、何處にさ、坊や?—と、母親は背を伸ばして訊ねる。

子供は空を指さす。

—そうら、あそこだよ!……ほら、ね、やつと、やつと見えるくらゐ。ほんとにずるぶん高いねえ!……

—ああ、高いね。——と相槌をうつて、母は再び仕事にとりかかる。

—何うして、とんびは落つこちないの? 翼も動かさないでさ!

—風に乗つてるのだよ。

イリュウシヤは驚嘆して、グツと首をうしろへ曲げるやうにして、なほもぢつと、鳶が大きく輪を描きながら、ますます高く舞ひあがつて蒼空を飛んでゐるのに、長いこと見とれる。

フロシカのある處から南へ四五丁のところ、高い緑の壁のやうに官有林が聳えて、野良を半圓に取りかこむやうにしながら、こちらへ押し迫つてゐる。その森の小暗い奥から、微風が強烈

な酔ふやうな香氣を運んで来る。フロシカは戦争の前までガウリーラが森番を務めてゐたことを想ひ出した。もし良人が召集されさへしなかつたならば、今頃は何の悲しみも貧しさも知らずに親子そろつて、水いらすの生活をしてゐたらうものを。しかも、幸福に恵まれて……。

フロシカは睡毛の涙を手で拂ひおとして、我が子と呼んだ。

—イリュウシヤや、晝食をたべに行かうよ!

二人は小川へ降りてゆく。その山蔭に(ワシカの泉)が湧いてゐるのだつた。その水は氷のやうに冷たく、黄金いろの砂を泉の底から吹きあげ吹きあげ湧きあがり、渦まき戯れて、勢ひよく水晶のやうな流れをなして走りながら、地下の闇の國から白日のもとへ噴出したことを悦ぶもののやうに、樂しげに石の上でサラサラとさざめいてゐる。上には、すこし傾いて、あたかも閑人の眼から泉を隠さうとでもするやうに、一本の白樺の若木が、こんもりと枝を張つてゐる。陽ざしがその柔かい嫩葉を漏れて、碧玉のやうな草の上へ鮮やかな模様をおとしてゐる。そこには小さな柱が立てられ、その頂きに三角の小祠がしつらへられて、中からは聖母の像が優しくさしのぞいてゐる。

—お母ちゃん、このお水どうして出て来るの?—イリュウシヤが不思議さうに泉を眺めながら訊ねる。

——神様がかういふ風におつくりになつたのさ。

——ぢやあ、神様は何時これをこしらつたの？

母親はそれには答へないで、流れの水で顔を洗ふ。子供も同じやうにする。ふたりの顔は爽々しくなつて、ぽつと赤味がさした。

辨當をつかひ出す。彼等の手には、鹽をたつぷり撒りかけた黒麵包が一むしりづつ掴まれてゐる。冷たい水を泉から直接に掌で掬ひながら啜る。

——ああおいちい！——イリューシヤが日焦けのした長い髪を振り立てて、はしやく。

榛の生ひ茂つた傾斜地のむかうから、ラリオン・ボロデーロフといふ鰥男で、肩幅の廣い、檜の樹のやうに頑健な、三十恰好の百姓がひよつこり姿を現した。たつぷりある茶いろの鬚は二つに分けられ、鷹のやうな鼻は内側へ曲つてゐるが、灰いろの眼は濃い眉の下から、柔和で慇懃な眼眸を投げてゐる。彼は右左へからだを揺りながら、ガニ股で小徑を足擦りしながら、泉の方へのそのそやつて来る。

ラリオンは會釋をして聲をかける。

——宜しくおあがり！

——ここへ坐つて、いつしよにあなたもおあがんなさいな。——さう言つてフロシカが愛想よ

くすすめる。

——ありがたう。だが、俺らはもう濟ましただよ。

ラリオンは子供の傍へ近寄つて、そつと其の頭をゴツゴツした手で撫でると、ニヤニヤしながら言ふのだつた。

——ほんとに好い坊やだなあ！——もう二三年もすれあ、何だよ、結構な手助けにならあな。

——おいたでしようがないんですよ。

——そうら、坊やに狐ッ兒が土産を持つて來ただよ。——さう言ひながら、ラリオンは若い瑞らしい虎杖を二本、子供に與へた。

イリューシヤは飛びあがつて、嬉しさの餘り雀躍した。

母親は感謝するやうに、ラリオンにむかつて微笑んだが、男は帯の間から斧をはづして、泉の彼方側の草の上へどつかりと坐つた。

——俺らは森ん中ぢゆう、ほつつき廻つて來ただよ。——と、彼は煙管と煙草いれを取り出しながら、話し出した。——困つたことが出來しをつてなあ。

——どうなすつただね？——フロシカが訊ねる。

——なあに、俺らの牝の犢めが迷ひ込みくさつてさ、いい加減さがし廻つただが、とんと目つ

からねえんだよ。ひよつと、これつきり方行しれずになつてしめえやしねえかと思つてなあ。

——それあいけないねえ。

——ほんとに、いけねえ譯さ。

食事を終ると、フロシカは着物の裾から麵麴屑を水の中へ拂ひ落して、十字を切つた。ラリオンは煙草を喫ひながら、特別の注意をこめて女を見つめる。

何處からか鶴の鳴き聲が聞こえて来る。

——クルル、クルル！——とイリユーシヤがそれを真似ながら、榛の叢林に覆はれた小川の方へ駈けて行く。

——面白え子供だ。——と、ラリオンは白い齒並を見せて笑ふ。

天候のことや、この秋の豊作のことが語り出される。突然、男は話頭を轉じて自分の身の上を話し出す。

——それはさうと、何だあな。まあ、いはば俺らも、これで相當にやつてるちうもんで。かなり世帯も張つてをる譯だて——馬に牝牛に牝犢を一匹づつと、豚を三匹、それに羊を十五匹から飼つてゐるだよ。まあ神様の御機嫌も損じなかつたちうものよ。ただ一つ、どうにもはや家の切り盛りが出来ねえだけが難物だて。娘つ見はやつと三つになつたばかりで、何處へ預けるちうと

ころも無し。かうやつて、もう農繁期にはなるし、からだか幾つあつても足りやあしねえんでなあ……。

——それあほんとに尤もだわねえ。——と、フロシカは感慨ぶかげに、指さきで鈕をまさぐりながら、相槌をうつ。

沈黙がつづく。男は縁無帽を脱いだ。亂髪の茶毛が日光に映えて焰のやうに見える。

——フロシカ、お前も何れは亭主を持たにやあなるめえか？——かう長くひつばるやうに言つて沈黙を破ると、言葉といつしよに男はフーツと煙草の煙りを吐き出した。

フロシカにはラリオンの思惑がはつきりして來た。——彼女はポツと上氣した。

——ふたりも子供を抱えて、何處へ嫁ぐところがあるものかね……。

——なんの、なんの。お前なんざあまだ若い女盛りでねえか。折角の若盛りをムザムザ臺無しすることあねえだよ。それに第一、家であ肩身の狭い思ひをしとることづらが？……

女は怪訝さうに男の顔をチラと眺めたが、相手の視線に逢ふと、直ぐに眼を伏せた。どうやら眞面目な話らしい。事實、家の中は面白くなかつた。家の者は誰も彼もが、彼女を白眼視して、彼女が人一倍せつせと働いてゐるのに、何ぞといへば侮辱的な言葉を浴せるのだつた。彼女の子供には碌々、食ひ物も當てがはず、まして彼女のためには、草履ひとつ繕つてくれようともしな

かつた。

——それで、お前、どういふつもりでゐるだ？——と、ちよつと黙つてゐてから、ラリオンは手で蛇を追ひはらひながら、追及する。

——だつて、自分にもわからないの……。

——ほい、ほい！……ぢあ、誰が一體、お前に代つてわかつて呉れようつてんだね？

——それもさうね。

ラリオンは、まるで偉い人物に面接する準備でもするやうに、頤髯を撫でつけたり、頭髮を調へたりする。細くなつた眼が貪るやうにフロシカを見つめてゐる。ちよつと邊りを眺めてから、彼は思ひきつて、かう訊ねる。

——なあ、仲人を派やることにしようぜ？

女は胸を波だたせて、顔へ血ののぼるのを覚えながら、頭を低く項垂れる。そんな幸福しよふせなことはまたと無いのだけれど、このままそれを甘受して好いものかどうかが分からなかつた。

——でも、あんまり急なんですもの——少し考へさせて下さいな……。

——だつて、今は愚圖々々しちやあゐられねえからさ。農繁期ぢやねえか。あれだ、これだと、仕事ばかり多くつてさ。それに、俺らのことあ知つてて呉れるとほりだ……。俺らあ實直な百姓

だよ、仕事を怠けるやうなことあねえやな。おつ死んだガウリーラにしてからが、お前めえが俺らと夫婦になれば、却つて喜ぶだらうぜ。お前も知つてるとほり、俺らとあの男とあ友達同志だつたからなあ。それに、俺らはお前が娘つ兒の時分から好きだつたものなあ。ガウリーラの奴がもうちよいと油断をしてゐたら、お前は當然この俺らの女房になつてゐたところだぜ。どうれ、それぢあひとつ、仲睦なごじくやつて行くことにしようでねえか……。へッ、フロシカ、萬に一つの間違えもなく、苺いちごみてえに甘え、楽しい家庭うちが持てるだよ！……。

小川に沿ふて、嘴の長い鳴が飛びすぎる。灌木の繁みでは、樂しげな白子鳩の啼き聲が聞こえる。斑點のある燕のやうな鳥が一羽、パイパイ啼きながら、木の枝にとまるかと思ふと、又あはただしくパツとたちあがる。——どうやら近くに巢があるらしい。

ラリオンは微笑わらひながら、元氣に茶毛の頭を振り立てて、

——それぢあ、フロシヤ、あれを派やるだよ、仲人をさ？

——どうなりと……。——やつとそれだけが聞きとれた。

ラリオンは立ちあがつて女に近よると、その手を握つて、愛しげに顔をのぞきこみながら、ソワソワして訊く。

——キッスをやらかさうか、え？



——キッスなんか何時だつて出来てよ……。そんなことより第一に、ちゃんと話をつけなくつちやあ……。

——うん、よしよし。ぢあ、あばよ……。

ラリオンは先刻さつきの小徑をとほつて引返して行く。

女は長いあひだその後ろ姿を見送りながら、幸福さうにきよときよとして、につこり微笑する。

——まあ、あの人が——運命の定めた妾の二度目の良人なんだわ。ひよんなことになつたわねえ。でも、どうにか、あの人と一緒にやらやつて行かれるわ……。

不意に初めの良人のことが胸に浮かぶ。すると、不覺にも涙がこみあげて来るのであつた。

——勘忍してね、戀しいガウリルーシカ、妾こんなに早くお嫁に行つたりして。でも、これもみんな子供の爲めを想つてのことよ。かうでもしなくては、何の頼りもない妾たちだけでは、どうにもならないんだもの……。あなたには、どうぞ、神様が好い天國のくらしをお授けになりませうに！……。

彼女は子供を呼んだ。

——何さ、お母ちゃん？——と、駈けて來た子供が訊ねる。彼の股引は膝の上まで捲りあげられて、兩脚とも泥まみれである。

——あのね、かうなのさ……。——母は優しく子供の頤に手を觸れながら口籠るのだつた。——ね、坊や……。どうを……。あのさ……。お母ちゃんが、坊やに新しいお父ちゃんを見つけてあげるが、好いかい？

——うん、見つけてよ、お母ちゃん！ だつて、誰んどこにだつてお父ちゃんがあるのに、坊やにばかり無いんだもの……。坊やは、みんなよりいけない兒なの？……

——だから、お母ちゃんもそれを言つてるのさ。

——でも、お母ちゃんは何處で見つけるの？

小兒の眼は輝やいた。彼はまぢまぢと母を見まもつた。

——そうら先刻さつきのラリオン小父さんが坊やのお父ちゃんになるのだよ……。——母は嬉しさの餘り吃るやうに、さう言ふと、わが子の顔に接吻してから付け足した。——だけど、これ内證なんだよ……。

イリューシヤは嬉しさうに咽喉を鳴らしながら、狼の仔のやうに母親のまはりを轉げまはるのだつた。

時刻はもう正午に近く、天も地も炎熱に喘いでゐる。相變らず雲雀は聲高らかに唄ひ、泉の水は絶え間なく、さながら長い長いお伽話を語つてもあるやうに、小石に戯れて、サラサラと眩

やきつづける。

## 五

晩秋の、灰いろがかつた退屈な日である。煙りのやうな雲が太陽と蒼空をつつんで、形のない不細工な層をなして積みかさなつてゐる。無情な烈風は引つきりなく吹き荒んで、黒い裸か木を容赦なく撓め、水溜りを波立たせ、さながら人間を脅かさうとでもするやうに、引き裂くやうな音を立てて、家のまはりを吼え狂つてゐる。小さな汚ない停車場で、百姓の男女や手代や商人たちが集まつて、ガヤガヤ言つてゐる。誰かのびしょ濡れになつた白犬が自分の主人を見失なつて、人と人との間を駆け抜けては、鼻をクンクン鳴らし、首をあげては、人々の顔を眺めまはしてゐる。少し離れて、雑貨店や酒場や商館のある邊りには馬が繋がれてゐる。周囲はがらんとして灰いろを帯びた春蒔きの野良で、馬鈴薯の植わつてゐた跡が掘り返されて黒い縞になつてゐる。

線路の遠くの方に晩の列車が姿を現はした。機關車から吐き出す濃い褐いろの煙りが、ちやうどお伽話の馬の鬣のやうに靡きながら、列車の上に長く尾をひいてゐる。鋭く突き刺すやうな長い汽笛が鳴る。すると間もなく轟々たる車輪の重々しい音が聞こえて、微かに地響きが傳はつて来る。そして數秒の後には、疲れたやうに喘ぎながら汽車が構内へすべりこんで来た。

乗客は汽車から降りると、てんでに食堂へと急ぐ。或る者は聲高に挨拶をとりかはし、或る者は別離を告げる。

ひどく猫背になつて、古い破れ外套に黒いポロポロの哥薩克帽をかぶつたガウリーラ・ウォドピヤーノフがやはり其の汽車から降りた。彼の顔は、黄いろい頸巻につつまれて、ただ一つだけ眼が覗いてゐる。背中には、物の一杯つまつた、汚れた麻の袋をしょつてゐる。片方の脚には、義足がつけられ、他方には、先きのただつびろい官給の赤靴が穿たれてゐる。松葉杖にすがつて、首がそちらへ振られてをる左肩を前方へ向けて、まるで浮世の辛酸に責めさいなまれた老いぼれのやうに、のろのろと彼は歩いて來るのである。やがて百姓たちの塊まつてゐるところまで來ると、彼は立ちどまつて、しげしげと一同の顔を眺めまはした。

——ゴルバトフカの衆はゐねえかね？——と、ガウリーラは低い聲で訊ねた。

——さあ、ゐねえやうだよ。——と、頤髯の濃い一人の百姓が答へた。——何ぞ用でもあるだかね？

——俺あ、村へ歸るんでね。誰ぞ、ところの衆がゐたら、馬車に乗つけて行つて貰ふべえと思つてよ。

すると少し間の抜けたやうな、無髯の若者がウォドピヤーノフをじろじろ眺めながら、口を出

——俺らが乗つけて行つてやらあな。俺らはワシニョフカの者だけんど、どうせお前さんの村を通るだから。今から直ぐ出かけべえや……。

——そいであ、いつべえ奢るべえから、いつしよに來ねえな。——と、ウォドビヤーノフがすすめた。

百姓たちは彼に戦争の様子を根掘り葉掘り訊きたがつたが、彼はそれには取りあはず、若者と連れだつて、靜かにそこを遠ざかつた。

食堂の酒場でガウリーラはゴソゴソと長いことポケットを探つて、やうやく二十五哥銀貨を一つ取り出すと、ウォツカを半饅とビスケットを半斤だけ注文した。だが、彼が頸巻を解いた時、若者は思はず後ろへあとずさりした。

兵士の顔はまるで、醜惡な假面そつくりだつた。鼻は殺ぎ取られ、片方の眼は潰れて、顔の右半面全體が、殊更めぐり取られたやうな、深い紫紅いろの創痕になつてをり、頤髯があちらこちらに少しづつ疎らに生えてゐる。額や顚顚の黄ばんだ皮膚には、もう幾月も顔を洗はないもののやうに、垢がこびりついてゐる。

——ねえ、きやうだい、露骨にいふだが、お前さんの顔あ、酷えもんになつてるだねえ！——

と、若者はおつ魂消ながら、首を振り振り言ふのだつた。——一體それあ、……………ただかね？

——さうだよ！——とウォドビヤーノフは氣のない返事をした。彼は周圍を見まはしたが、仰天したやうな人々の視線に出逢ふと、己れの醜い不具の顔が氣恥かしくて、赤面しながら、賣臺の上へ低く身を屈めた。

——ちえッ、何ちう酷えことをしやあがるんだ！——と若者は言葉をつづけた。——まるつきり、鬼畜の所行でねえか。

かうした言葉が、ガウリーラの心の癒えきらぬ創口を突き刺した。彼は誰の顔も見ずに、そこへ出されたウォツカを急いで二つの茶碗へ注ぎ分けると、その一つを取りあげるなり、仰むいてグビリグビリそれを飲み乾した。若者は自分の分を一氣にぐつと飲み乾すと同時に、咽喉を鳴らしながら、ビスケットを嚙つた。

——さあ出かけべえ。——ウォドビヤーノフは陰氣にさう言ふと、まるで手に餘る重荷でも背負はされたやうに、體を曲げて出口の方へ歩みだした。

二人が出發したのは、もう黄昏どきであつた。馬はブルツと一つ身を顚はせると、速い跑足で車上の二人に泥土をはねかけながら、家路をさして急ぎだした。ガウリーラは豆穀の上へ横にな

つたまま、暗い顔で馴染の土地を眺めまはした。車輪が凸凹した轍へはまつて跳ねあがる度毎に木製の義足が馬車の底板にコツンコツンあたる。若者は上衣の胸をはだけたまま並んで坐つてゐる。今ひつかけたウォッカで彼の顔は、よく焼けた煉瓦のやうに赤らんでゐる。

——ねえ、きやうでえ、いつてえ彼地あつちではどんな風に戦争をしただか、聴かしてお呉れよ。——彼はさういつてガウリーラにせがむ。

——勘辨してくんねえ。それに何も話すがものあねえだよ……。——とガウリーラは、健康と力に充ち溢れて、如何にも氣持よく馬に掛聲をかける若者を眺めながら、斷はつた。

雨は降りもせず、空気が爽々しくなつて來たが、風は相も變らず強情に吹きつゝのり、雲に塞がれた空はいつかう霽れさうにもない。谷あひを通りすぎると、前方には秋蒔きの野良が暗緑色の敷物のやうに廣々と展開して、その上を黒い蛇のやうに細い道がうねうねと延びて、遠方の闇の中へ没してゐる。もう停車場は見えなくなり、あたりには人影ひとつ、家畜一匹見あたらぬ。ただ、反對の方角から一臺の荷馬車がこちらへと近づいて來る。その上には、まるで焼棒杭のやうに黒々とした、髯面の百姓が一人つくねんと坐つてゐる。

——ちよつくら停つて呉んねえ、きやうでえ！——と、ちやうど擦れ違ひになつた時、その百姓が喚いた。——お前めえさんたちあ、煙管パイプへ詰める烟草をちつとべえ持ち合はせてねえだか？

——あるだよ！——と、若者が自分の馬を停めながら、喚きかへした。双方の馬車はすれすれになつて停つた。

聞き憶えのある聲を耳にしたガウリーラは、すこし體を起こして、今し自分の馬車から降り立つた男の顔を見やつた。果せるかな、それは伴イリューシヤの洗禮をして呉れた、同じ村の百姓であつた。

——御機嫌さん、ロデオンの教父とつつあん！——と兵士は挨拶した。

——御機嫌さん！——と、百姓は首をのぼして、兵士の物凄顔ものぢいを覗きこみながら應へた。——どうも俺らにあ、お前さんの顔に見憶えがねえやうだが……。

——ガウリーラだよ、俺あ……。ウオドビヤノフだよ……。

——だ、誰だと？——先方は眼を剥き出して問ひ返した。

——お前めえの伴の洗禮をして貰つたガウリーラだよ……。

若者はポケットから煙草の袋を取り出したが、髯面の百姓はギョツとして後ずさりをする、十字を切つて、急いで自分の馬車へ飛び乗りざま、力まかせに馬に鞭をくれて一散に駈け出してしまつた……。

——何ちやう頼馬野郎ぢや！——と、その後ろ姿を見送りながら、ステパンが笑ひ轉げた。——

名付け兒の父親に會つて逃げ出すなんて……。だから手前たちのことを、森ん中に住んでゐる手あひは車の輪さへ拜むつてえのも無理あねえ……。

そして馬の手綱を引きしぼつて、再び馬車を走らせながらも、彼は笑ひつづけた。

ウオドビヤーノフは一言も口をきかずに、豆穀まめがらへ顔を押しつけた。酔ひのまはつた彼の頭の中には慰め難い思ひが佗しく群がり起こつた。俘虜の身として彼は堪え難い肉體的な苦痛を忍んで來たけれど、自分が全くこの世に無用な者となり、醜惡な面相で他人に忌はしい嫌惡の情を煽るより他に何の能も無い人間だといふ自覺は、更に大なる苦痛であつた。一度ならず、いつそ自殺してしまはうかといふ考へが彼を捉へさへしたけれど、彼地には彼のやうな不具者が、否もつともつと酷い連中さへが夥しくゐたために、何時とはなしに彼をこの慘めな情勢に融和させてゐたのであつた。

夜が無邊際むへんげいの黒い帷で地上をつつんだ。どちらを見ても物の文目も分からず、萬象まんのみが深い闇の淵へ沈んでしまつた。馬はただカンで馴染の路を推測しながら歩を進める。風は馬車を横倒しにしようともするやうに、狂暴に片方から吹きつける。若者はまだ先刻の出來事が忘れられずに笑ひながら、かう話しかける。

——えらく周章しゅうしやうてふために突つ走つたもんだて、お前おまえさんの教父きやうふつあんとかあ……。まつた

く、けつたいな男つたら無えや。ほんとに可笑しくつてさ……。ははッ、こちとらが後を追つかけてもしようものなら、おほかた奴さん、はらわたを斷ちぎらかしてしまつたことづらに……。

さう言つてから、今度はガウリーラの方へ振り返つて、

——お前おまえさんは何でまた黙つてゐるだね？

——俺に何を話すことがあるだ。

——さあ、何つてことあねえだが……。一概に……。

——俺らあ、話どころぢやあねえわい……。

ステパンは面白さうに馬を驅り立てたが、ウオドビヤーノフは陰鬱な考へを拂ひのけようと努めながら、子供たちと再會する時のことを空想するのだつた。勿論、最初のうち彼等はこの父親を怖がるだらうが、その中には馴れるだらう。彼が袋の中に忍ばせてゐる土産で、うまうまと子供たちは手なづけられてしまふだらう。下の女の子のためには、これまで見たこともない日本の人形が、上の男の子には、ゼンマイを捲くと、小さな車を曳いて床ゆかの上をひとりでに走り出す支那人の玩具が用意してあるのだつた。

空中には、ちやうど白い蝶々のやうに、軽い綿毛みたいな雪が舞ひ出した。それがだんだん烈しくなり、いよいよ繁く地面へ降りはじめ。そして遙かに白い雪の網をとほして、もうゴルバ

トフカの灯影がチラチラと閃めき出した。

壁に掛けた鉄力製のカンテラが、鈍い光りでウォドピヤーノフ一家の小屋の中を照らしてゐる。家族一同はいま夕餉をしたためてゐるのである。食卓には二人の兄と、その各々の妻と、それに六人の子供が坐つてゐる。寒さに馴れた男たちは顔に汗をかいてゐる。クワスト、脂肪ちよぶらつ氣のないキャベツ汁だけは、みんな存分に喰つたが、麻油あまふらを入れた稷粥が食卓へ出ると、一同はめいめい順番の來るのを待つて手をさし控へた。先づトゥリフォンが匙を取つて最初に掬ひ取ると、次ぎがサヂシカといふ順序で、最後は三才になる小ツ子ちびだつた。この秩序を破る子供は、大人に匙でその前額おでこを小衝かれて、厳しく、かう窘められるのであつた。

——こうれ、どうぢや？

一同は固睡かたうをのんで、共用の木鉢を見まもつてゐる。顔はげんなりして、眼がポーツと霞み、減多かたにものを言ふ者もない。壁や天井の隙間から這ひ出した油蟲が、ヒゲを動かしながら、ゾロゾロと歩き廻る。圓々しく食卓の上へ這ひあがつたり、天井からポトリと茶碗の中へ落ちて來たりさへする。

往來からは風の唸り聲が聞こえて、入口の扉がゴトゴトと鳴り、綿のやうな雪の一杯にへばり

ついた窓硝子が震へる。

トゥリフォンは窓をちよつと覗いて、

——ええ、ほんとに何といふ氣違ひ天氣づら……糞糞つ！

——まつたく、どういふもんだかなあ、いつてえ風ちうものは、生きてるのか、ゐねえのかなあ？——と、サヂシカが兄にむかつて言ふのだ。——そうら聽いて見ねえな、まるで人間が呻つてをるやうでねえだか……。

——風がかい？

——うん。

——さあ、それだよ……。

トゥリフォンは肩越しに肘を曲げて肩甲骨の上をボリボリ搔きながら、さも確信ありげにかう答へる。

——あれあ幽靈だよ。

——それならそれとして、一體それあ精靈なんか、それとも悪靈なんけえ？——と、粥をゴクリと呑みこんで、匙をしゃぶりながら、サヂシカがつづけた。

——それあ知んねえだよ。兎に角、夜分ちうものあ怖えや、とりわけ森ん中や原つばの眞中と

來ちあな……。

ぼそぼそと、まるで夢でも見てゐるやうに、退屈さうに兄弟は語りつづけてゐた。入口で外の扉がバタンと鳴つた。すると風が土間へ吹きこんで來た氣配がして 誰かの、馬の足のやうに重々しい蹺音が聞こえる。

食卓では、固唾をのんで、怯えたやうに一同が顔を見あはせる。

誰か長いあひだかかつて壁を手さぐりしてゐるやうだつたが、やがて扉があくと、體ぢゆう泥まみれになつて、頭から雪をかぶつたガウリーラが、達者な方の足で鬨を跨いで、ためらひ勝ちに小屋の中へ入つて來た。彼はまるで夜魔の幻影のやうに、陰氣くさく、ポロポロになつた哥薩克帽のほつれの下から家族一同を眺めまはしながら、小屋の眞中に突つ立つた。

一同はあまりの怖ろしさに茫然自失してしまつて、粥を口に含んでゐた者は、そのままそれを嘔み下すことも打ち忘れた。一同の顔はまるで白墨のやうに蒼白め、眼は硝子玉のやうに、またたき一つしないで、見張られてゐた。

ガウリーラは自分が一同を極度に驚愕させたことをハッキリ悟ると、胸の中が、涙の滲むほど侘しい苦痛でいっぱいになつた。しかし彼は忽ち己れを制御した。そして、一刻もはやく自分の肉親一同を安堵させようと思つて、手ばやく頭から帽子を脱ると同時に、聖像にむかつて十字を

切つて、おもむろに口を開いた。

——みんな、達者だなあ！

——たつ……たつ……達者で……。——と、トゥリフォンが死人のやうな唇で呟やいた。

子供たちは、まるで號令でもかけられたやうに、一時にワツと聲をあげて泣き出し、女どもはめいめい口の中で祈禱を唱へた。

——うちのガウリーラが分からねえのかね？——と、兵士は忍び難い屈辱を聲の調子に響かせながら、詰るやうに訊ねた。彼の左の眼には涙がいつばい溢れてゐた。彼は寢棚の方へ行つて、外套を脱ぎにかかつた。

やつと、サヂシカが思ひきつて叫んだ。

——ガウリーラだつて！ ほんとにお前なのけえ？

——さうだとも、俺らだよ……。

だが、トゥリフォンは、なほも訝かりながら、ガウリーラについていろいろと質問を浴せかけるのだつた。

——待ちねえ、待ちねえ……どうも、そんな筈あねえでねえか？……お前は戦死をした筈でねえか？

——おほかた戦死もしなかつたのだらうさ、かうしてちゃんと家へ戻つて来たところを見れあね……。

——それあよかつた……。俺らはまた、お前はてつきりおつ死んだものとばかり思つてゐただのに……。

——おやおや、どうして又そんな風に思つただね？ 俺あ捕虜になつてゐただに……。——と、外套のバンドの尾錠をはづしながら、ガウリーラが應へた。

まつ先きにサヂシカがテーブルから立ちあがると、トゥリフォンがそれにつづき、その後から女たちがどよどよと席を立つた。けれど、我れと我が眼が信じられないやうに、一同は兵士の傍へ近寄るのを尻込みした。だが、恐怖の影は少しづつ薄らいで、ただ氷水に漬かつてゐるやうな胸震ひだけが止まなかつた。男たちは吐息をつき、女どもは駭りあげた。子供たちは上手の隅つこへ一魂まりになつて、聲をひそめながら、怖いもの見たさにガウリーラを見つめてゐた。

着ふるした軍服ひとつになると、兵士は松葉杖を片手にテーブルへ近よつて、どつかと腰掛に尻をおろした。子供たちは逃げるやうに彼方の方へ遠ざかる。大人たちはかはるがはる兵士に近づいては、その手を握つて挨拶を交はしたけれど、誰ひとり接吻する者はなかつた。

——時に、お父つあんはお前の留守の間に亡くなつただよ。——と、哀しさうにトゥリフォン

が告げた。

——死んだのかい？

兵士はブルツと身を震はせた。彼は下顎をわくわく動かしながら、黙つて十字を切つた。それから、子供たちや女たちや、家の中ちゆうをあちこち見まはしてから、氣づかはしさうに訊ねた。

——で、嬢あはどこにゐるだね？ それに俺らの子供どもは？……

女どもと二人の兄とは、依然として弟の前に突つ立つたまま、いふべき言葉もなく互ひに顔を見交はした。

——さあ、早く話しをしてくんねえ！——とガウリーラは聲を頓はせながら叫んだ。そして何か不吉な豫感に體ぢゆうをワナワナと震はせた。

——お前の女房は達者だよ、子供たちもお蔭で丈夫だ……。——と、神経的に、貧乏くさい頤髯を指で動かしながら、トゥリフォンが口をきつた。——ただちつとべえ……混みいつたことになつてなあ……。

茲でちよつと彼は口を噤んで、次の弟の方を見やつた。するとサヂシカは、何處か外方へ視線をそらしながら、手を振り振り、その先きの説明にかかつた。

——それあ、ガウリーラ、かういふ譯なんだよ……。區長が通知書を讀んで聞かせたところで



あ、お前はもう戦死を遂げたつてえことだつたんでなあ……、うちではお前の弔ひ葬ひもしたり、後世安樂の追善供養もして……正教徒としてするだけのことか何もかもやつただよ……それはそれで別に何もいふことあねえ譯だが、そら、あの赤鬼のラリオンの奴がちやうど鰥になりをつたのだよ。俺らたちあ、フロシカに呉々もさう言つたのだ、うちにゐな、力になつてやるだからつてなあ。そして彼女をば家族の者として盡してやつてゐただのに……彼女の方でそれを嫌ひをつて……勝手に嫁に行つてしまつただよ、あの茶毛のとけえさ……。

兵士は上體を前へ乗り出すやうにして、歎願するもののやうに、左の眼で一同の顔を次ぎ次ぎに眺めた。彼はこのサヂシカの言葉を誰かが否定して、別の解説を下だしてくれらることを必死に待ち望んだのである。しかし、みんなは無言のまま、身じろぎ一つしないで、首うなだれて立ちつくしてゐた。家の中が森閑として陰氣になつたのに引きかへ、戶外では吹雪が猛々しく吹きつゝのり、ガタゴトと窓の鎧扉を叩き、入口の外扉をあけては、ボタンボタンいさせて、小屋の壁を激しく揺ぶつた。

——嫁に行つただと、どんな風にさ？——と、それでも、まだ兄の言葉が會得めないで噎がれた聲でガウリーラは問ひ返した。

——ちやんと正式にさ。教會で式を擧げただよ……。

この知らせは、さながら大盤石でも叩きつけられたやうに、ガンと兵士の腦天をどやしつけた。彼は妙に力なく腰を落すと同時に、息を吐ぎらした。ついで、彼の醜い顔は澁面をつくり、口が歪んで、殺がれた鼻のあとの赤い二つの孔がピクピクと動きだした……。彼はいつまでもいつまでも、何か身のまはりを探りまはしでもするやうにしながら、こんな風に呟やくのだつた。

——この俺を何といふ日に逢はせやあがるんだ……えいッ！……

## 六

風は夜のうちに凧いで、すつかりおさまつた。翌る朝は靜かな、すこし凍てた朝で、東雲の空は朝焼けがして、薔薇いろがかつた橙いろの色調に染められてゐた。闇を追ひ散らしながら黎明の光りがいとも嚴かに映じて、宵越しの斷雲をここに残した鈍色の空が、いよいよ高くなる。地面の上にも、蘆葺き屋根にも清らかな白雪が、薔薇いろを帯びた陰影をもつ薄い經帷子のやうにかかつてゐる。村はやうやく眼覺める。門が軋み聲をあげ、扉がボタンボタンと鳴り、人聲が聞こえだして、夜の間に腹を空かした牝牛が啼き聲を立てだす。二三の家の外庭では百姓たちが薪を割つてゐる。庭や家近くの木々では、あらしの夜の後の快晴の日の近づくのを樂しむやうに、妙にとりわけ鋭く鴉が鳴き、雀が唄ひ、鶉が囀つてゐる。すべての音響がはつきりして朗らかで

ある。そこここでは、もう家の中でペチカを焚きつけてゐる。窓にはチラチラと明滅する焔が映り、煙突や明けはなした戸口からは灰いろの煙がムクムクと吐き出されて、まつすぐに上へ騰ちのぼると、徐々に爽やかな朝の大氣の中へ消えてゆく。

ガウリーラは二人の兄に伴はれて、ラリオン・ボロヂーロフの家をさして出かけた。彼は、まるで深い濠の上へさし渡された狭い板橋を渡る時のやうに、左足を前へ踏み出しては、靜かに用心ぶかく歩を運ぶのであつた。妻子のことを聞かされて甚く昂奮した彼は、夜つびで一睡もせず明かしたので、今はぐつたりと疲れを覚えて、苛々してゐた。兩の腕がブラブラと揺れ、不具になつた顔の筋肉はひきつり、苦惱のために腫れあがつたやうに重い頭の中には、さまざまな思ひが群がり亂れて彼の思索を妨げた。彼は一つきりの眼で、地上にうづくまつた穢い小屋や、屋根の落ちた百姓家や、裸かの白楊の樹や、がらんとした菜園を眺めた。しかも不思議なことに、彼にはすべてのものが何か知ら物足りなかつた。出征するまでの野良とは何處か違つたものに思はれてならないのである。おや、白い頰髯を長くのばした、腰の曲つたコスチャ爺さんが戸口から出て来て、寢ぼけ眼をこすりながら大きく欠伸うげんをすると、帽子を脱いで、バツと紅みのさした東の空にむかつて十字を切る。ワリーニカ・コスリーヤが、自分の家の窓の下で鞞毛の去勢馬を馬車につけてゐる。ウォドビヤーノフ兄弟の姿を見とめると、彼は自分の手をお留守にして、じろじろ二

人を眺める。前方を、ガチャガチャとバケツを鳴らしながら、若い女が井戸の方へ駈けて行く。

——ナースチャ、途を横切らねえで呉んろ！——と、腹立たしさうにトゥリフォンがその女にむかつて喚く。

女は立ちどまつて、ちよつとの間、ギョツとして兵士の顔を眺めたが、急いで家の中へ駈け込んだ。

ウォドビヤーノフ兄弟が訪れた時には、ラリオンは家族と一緒に疾とつくに起きてゐた。當の彼は庭へ出てをり、フロシカはペチカを焚いてゐた。女の兒二人は寢棚の上で遊んでゐたし、イリユーシヤはナイフを持つてテーブルの傍の腰掛に坐つて木切れで何か細工をしてゐた。明るい窓のある、廣々として小ざつぱりした家の中へ入ると、兄弟は鬨とぎはに立ちどまつた。トゥリフォンとサヂシカとは先づ神前に祈禱を捧げてから、挨拶の言葉をかけた。

兵士の姿を一目みるや、蒼白めた顔に唇の色まで失くして、フロシカはたちちと後ずさりをすると共に、兩手を胸に當てたまま腰掛へ崩れてしまつた。子供たちはその場をばつと飛びあがつて、母親のまはりへ駈け寄りざま、あまりの怖ろしさにピツタリと體をすり寄せた。

ガウリーラは帽子も脱がずに、まるで床ゆかの中へ根を張つたやうに、無言のまま、同じところに突つ立つてゐた。もう自分にとっては赤の他人になつてしまつた妻や子を目のあたりに見ると、

灼きつくやうな屈辱が彼の胸に溢れるのであつた。妻の顔を見つめながら、彼はおし殺したやうな低い聲で詰つた。

——フロシカ、手前は何といふことをして呉れたのだ？……亭主が生きてをるのに、再婚するなんて……。

ガウリーラはベチカの踏段につかまつて、がっかりしたやうに首うなだれた。

兄たちは、なすべき術も知らず、音もなく交互に足を踏みかへながら、斜めに敵意のこもつた眼<sup>まなざし</sup>眸を女に投げてゐた。一瞬の間、家の中はシンと静まりかへり、ベチカの中で乾れた薪が燃えながらパシパシはぜる音のみ高く聞こえる。大きな黒猫が、己れの爪の力試しに卓の脚をバリバリと搔いてゐる。横手の窓からは、おづおづと朝日が明るい光りをさし覗かせる。

その時、家の中へ、鼠いろの羅紗地の半外套に帯をぎゆつと緊めて、重い犢皮の長靴を穿き、仔羊皮の帽子の下から茶いろの髪を食み出させたラリオンが、タールの臭ひのブンブンする頸<sup>くき</sup>圈を持つて入つて來た。

悠々として腰掛の傍まで行くと、そこへ頸圈を置いて、さて徐ろにこちらを振りかへつた彼は、兵士を頭の顛邊から足の爪先きまで仔細にじろじろ眺めたが、やがて、それがガウリーラであることに気がつくと、濃い眉を蹙めた。僅かにそれと認められる一抹の不安の影が彼の面をサツと

走つた。

——それで、一體どういふ用だね？——と、赤い頰髯を兩方へ分けながら、強い語調で彼が訊ねた。

——嬢あのことだ來たんだ……。——と、ガウリーラはぢつと苛だつ心を抑へながら答へた。そしてどうする力もない嫉妬をもつて自分の敵手を——岩疊で臂力の強さうな相手を打ち見まもつた。

——それで何うしようといふんだね？

——嬢あと子供を返して貰はう……。——

すると、どつしり一歩まへへ足を踏み出して、ポロヂーロフが低い聲で、かう叩きつけるやうに答へた。

——うんにや、ガウリーラ、どちらも與ることあ出來ねえ……。——

トゥリフォンが右手の人さし指をあげて、口を挿んだ。

——待ちねえ、ラリオン！ 手前<sup>てまへ</sup>にあ他人の女房つ兒を引き留めておく権利はちつとも無えんだぞ……。——

——嘘をつけ、権利はあらあ！——と聲を高めてラリオンが喰つてかかつた。——和尙んここ

の帳簿にちやんと書きつけてあらあな。俺らは彼是と變な眞似をしてるんぢあねえ、掟に従つて女房と同棲してゐるんだ……。さうだとも！ 婚禮にだつて、俺あ六十留からかけたのだぞ。分かつかい？……。

口論が白熱して來た。百姓の男女や子供たちが駈け寄つて、物めづらしさうに窓から家の中を覗きこんだ。フロシカは我れに返ると、前掛けで顔を覆つて、ブルブルと震へてゐた。彼女のまはりへ二人の女の兒がしがみつき、イリューシヤはラリオンの傍へ駈けよると、その股引をひつぱりながら、かう叫んだ。

——父ちゃん、あいつを家から逐つばらひなよ……。

——坊や、こつちへ來な！——ガウリーラがさう言つて子供を呼んだ。

——厭だ、馬鹿ツ！——と、イリューシヤはラリオンのうしろへ隠れながら、ガウリーラに答へた。

何か、かう暗い波のやうなものが兵士の頭の中へ押しよせて、彼の意識を曇らせてしまつた。彼は亂暴に松葉杖で床を叩きつけると、全身をブルブルと顫はせながら、とりとめもない言葉を喚いて、唾を吐いた。

——何を俺らは、ぼんやりして赤毛の畜生を眺めてをるだ？——と、急にサヂシカがいきり立

つた。——さあ、ガウリーラ、女と子供を連れて行きねえ、何も遠慮にあ及ばねえんだ！ 手前のものにきまつてらあな……。

喧噪と叫喚が沸き起こつた。子供は泣き叫ぶ。ウオドピヤーノフ兄弟は、兩手を振り立てながら嘯鳴り散らして、力づくでもフロシカを奪ひ去らうといふ氣勢を示す。ラリオンは彼等の前に立ち塞がると、眞赤になつて、憤怒の眼をキラキラ光らせながら、凄まじく怒號する。

——汝らあ指いっぽん觸えて見ろ！……生かしちあ返さねえぞ！ ひと歩でも傍へ寄つた奴あど頭を振ぢちぎつてこまずぞ！……

筋肉たくましい兩手を擴げ、廣い胸を突き出して、全身に怒り毛を逆立てながら 太いガニ股の脚を踏ん張つて、彼は立ちはだかつた。

が、サヂシカが拳を固めて、一步前へ踏み出すと、ラリオンはクルリと體を廻して、腰掛の下から斧をおつ取りざま、それを振りかぶつて、喚いた。

——ぶつ殺して呉れるぞ！……

トウリフォンとサヂシカは怖毛をふるつて往來へ飛び出した。けれどガウリーラは一步もその場を動かさず、頭をしゃんと立てたまま、自分の方へ近寄つて來るラリオンの兇惡な顔を見つめてゐた。憎惡と敵意に充ち満ちた二人の視線がピッタリ出逢つた。

——出て行け！——と、赤い髯を顫はせながら、剝き出した齒の隙間からラリオオンが吐き出した。

——斬れ！——と、喘ぎながら兵士がそれに應へた。

——罪を犯させるな……。

窓の外で叫び聲が聞こえる。

フロシカは度を失なつて、初め何か口走らうとしたが次ぎの瞬間には、眞蒼になつてポロディーロフの首にしがみついて、彼を後ろの腰掛へ押し戻した。そして、

——ラリョーシャ、いけない……あんた、好人だから心を落つけて頂戴、ね、何もかもを滅茶々にしないで……。

ガウリーラは、今にも自分の心臓が破裂しさうな気がした。彼はワナワナと全身を顫はせると、サツと顔色を變へて、あはただしく家の外へ出ながら、嗚がれ聲で吐き出すやうに言つた。

——犬畜生め！……。

ラリオオンはその後ろから入口の扉を閉めて門を差すと、部屋へ戻つて、腰掛へ坐つた。そして身を屈めて深い物思ひに沈んだ。

——妾たちは、一體どうしたら可いでせう？——と、涙に泣き濡れながら、フロシカが訊ねた。

ラリオオンはそれには答へようともせず、氣むづかしく床を睨んでゐた。

ポロディーロフの家のまはりには殆んど全村の者が集つてゐた。雪は踏みにじられ、泥にまみれて、秋の日の光りを受けた畠や野原にだけは、優しい純白の雪がチカチカと輝やいてゐた。

ガウリーラは、中には彼に同情を寄せ、彼の立場を是認する連中も混じつてゐる群集の間に揉まれながら、身悶へしたり、啜り泣いたりして訴へるのであつた。

——皆の衆！ どうして俺らは、こんな酷い恥をかかされにやあなんねえだ？……俺らは御國のために血を流して來ただ、お前さんたちのためによ……それだといふのに、これはいつたい何ぢやい？……

それから、ポロディーロフの家を睨みながら、臆恚をこめて威嚇するのだつた。

——焼き殺してやるぞ！……手前たち二人を鐵砲で撃ッばなしてやるぞ……どうせ俺あ**自暴自棄**だ……。

そして、兄たちが彼を家へ連れ歸ると、ガウリーラは汚れた麻袋から、我が子のためにと買ひ求めて來た玩具を取り出して、床の上へ叩きつけると共に、達者な方の足をあげて、それを踏み碎いてしまふのだつた。

一日と経ち、二日と過ぎた。

兵士は何處へも顔を出さず、家の中に坐つたまま、兇暴な敵意に沸き立ちながら、どうしてボロヂーロフに復讐をしてやらうかと、ればかり思ひ廻らしてゐた。重苦しい、夜のやうに暗い止むに止まれぬ殘虐な思ひが彼を揺ぶつた。

突然、ガウリーラの許へ一人の知合ひの百姓が訪ねて来て、入口の土間へ彼を呼び出すと、ラリオンが彼を自宅へ招いて仲直りをした上、彼に妻子を返したいと言つてゐることを、そつと知らせた。事の意外にすつかり面喰つたガウリーラは、それには何か老獪な謀計がたくらまれてゐるのではないかと疑がつて、長いあひだ躊躇した。けれど、その百姓が、決してそんなことはないと言つて彼を説得したので、やつと思ひきつて敵の家へ出かけてみた。そして、突然に降つて湧いた災難に打ちひしがれ、浮かぬ顔をして、シャツ一つで帽子も被らずに其處へ出て來たラリオんと、ばつたり入口の上り段で顔をあはせた。ラリオンは放心したやうに挨拶をすると低い吃るやうな聲で言つた。

——うん……かういふ譯なんで……俺あなあ、きやうでえ、示談で片をつけることに肚を決めただよ、人間同志としてさ……。俺らはお前めえとあ友達だつただから、何處までも友達として、や

つて行かうでねえか。さあ家うちい入らうや……。

彼は部屋の中へガウリーラを招じ入れると、食卓の一方へ彼を坐らせて、自分は向ひ側へどつかり腰をおろした。テーブルの上にはウオッカと前菜つまみものが用意されてあつた。誰もぎこちなく口を噤んでゐた。フロシカは押し黙つて腰掛にかけたまま、はふり落ちる涙を拂ひながら、自分の先夫の物凄しい面相を見るのを怖れて、ブルブルと身震ひをしてゐた。煙突のうしろへ隠れるやうにしながら、ベチカの上から臆病さうに子供たちがこちらをさし覗いてゐた。ラリオンの鬚も上髭もひどく纏れてゐた。顔は曇り、赤い髪の毛の毛もぢやもぢやした顔は屈託のために腫れあがつたとてもいふやうに、ヤケに大きく見えた。

——まあ一杯やらかさうや！——ウオッカを二つのコップに注ぎ分けると、彼はガウリーラにむかつて奨めた。

——よからう！——とこちらも頷いて答へた。

コップをかちあはせて、二人はそれを飲み乾した。

ラリオンは唾を吐いて、シャツの袖で上髭を拭いてから、掌で軽く食卓を一つ叩いて、ポツリポツリ、一語々に用心しながら、話した。

——それぢやあ、きようでい、一つとつくり相談をしようぜ……、誠心誠意からなあ……。俺あ

もう隠しだてはしねえだが、人から聴けば、法律上、嬢あはお前のものに違えねえつてことだ。さうだ……彼女を連れてつて呉んねえ、子供たちも引き取つて呉んねえ……今すぐにだつていいだよ……。

フロシカの胸は消え入るやうな思ひであつた。

ガウリーラは瞬漿をしぼつて、注意にも注意してラリオンの言葉に耳を傾けたが、相手は、指を擡げた右手で無意味に空を切りながら言葉をつづけた。

——嬢あを怒らねえでやつて呉んろ、彼女にやあ何の罪もねえだ。お前が生きてゐるやうなぞとあ夢にも知らなかつただし、お前の兄貴たちやあ、碌ずつば彼女のことなど構つちやあ呉れなかつただ……そんな譯で、早まつたことをしてしまつただよ……。俺らはまた、このフロシカとあ仲睦まじく暮らして來ただ……。心底からの話が……滅法氣だてのええ女だ！ それにお前の子供たちも俺あ可愛がつただよ。さう思つただ——まあ手鹽にかけて育てあげて、立派に世間へ出してやるべえとな……。だけど、今となつてはもうそれもこれもお仕舞ひさ！ それといふのも何だあ……。

ここで言葉を中斷して、ラリオンは齒を喰ひしぼり、絶望的に赤毛の頭を振つた。彼の顔はがっかりしたやうな悲痛な表情を現はし、峻しい額には赤い太い横皺が生じて、血走つた眼はまとも正面の壁の隅へぢつと陰氣に注がれた。その顔を見ると、どうした譯かガウリーラの心は一時に折れた。破れた彼の胸に初めて己れの仇敵に對する同情の念が沸きあがり、怨恨の情は或る溫和な優しい心に席を譲つて、徐々に消えて行つた。二人は更にもう一杯づつ盃を重ねた。ラリオンは大きく音を立てて胸の底から息を吐き出すと共に口を開いた。

——ひとつ、きやうでい、よく勘考しようぜ、いつてい何うしたものだか。

——ああ、さうしよう。——ガウリーラは左脇と共にポロディーロフの方へ向き直つて相槌を打つた。

——お前、嬢あや子供は可愛いだらうな？

——それあ可愛いとも……でなかつたら、歸つてなんぞ來るものかい……。

——なるほど……ぢやあ、これから先き女房つ子を抱へて、一體どうしてやつて行くつもりなんだい？

——どうか、神様の恵みで生きて行くだよ。

——やつて行かれるかなあ？ 神様も神様だが、自分が迂闊ぢやあ駄目だよ。これあ神代の昔から誰にでも分かりきつたことだあな。そこを考へなきやあなんねえだよ……。二人子持で、まだその上に三人目が生まれるだからなあ……。

——何だと？——兵士は左の眼をかツと見はつて聞き咎めた。  
——分かりきつたことよ、彼女あ身重になつてをるだよ、フロシカがだよ……。もう五月目だ  
あな……。

これは又、兵士にとつては辛辣極まる怖ろしい打撃であつた——恰かも誰か残忍非道な人間が執念く彼の跡を随け狙つて、小衝きまはしてでもゐるやうに。彼は切なく喘ぎながら、フロシカを眺めた——彼女はドギマギして黒味がちの眼を伏せ、羞恥の潮紅に顔を染めた。ガウリーラは蠟のやうになつた額を手で擦りながら、何か考へようとあせつたが、何ひとつ考へられなかつた。ラリオンはちよつと黙つてゐてから、まるで盤石のやうな重みのある言葉で相手を説き伏せにかかつた。

——とどのつまり、女房と子供を殺してしまふだけのことだよ。お前といつしよになつても、彼等あれらにあ生きる空はねえだよ。さうだとも、生きる空はねえだ……。まあ、われと我が身を振り返つて考へて見ねえな——今のお前おまえが何の役に立つと思ふのだい？ お前おまえを見れば、みんな怖毛を慄おそふだけだよ……。お前はもう早、この世の人間ぢやあねえんだ。ものの一二年もすれあ、文無しになつて、行きつまつてしまふにきまつてらあな。さうなつたら一體どうしようつてんだ？ ……ようつく、茲のところを考へねえよ、——お前のためにどれだけ不仕合せな人間が出来あが

るかつてことをよ……。こんなことを言つたからつて、俺を咎めねえで呉んろよ……。俺あ、誠心誠意から言つてることだからなあ……。

彼はなほくどくどとそんなやうなことを述べ立てた。そしてガウリーラには、これまで彼の頭を塞ふさしてゐた黒い帷かたびらりが裂かれたやうに、自分が故郷へ歸つて来たばかりに他人が不幸に陥るのだといふことが、だんだん明瞭になつて来た。

——それぢやあ一體、この俺は今どうしたらいいんだい？——と、彼は両手で頭を抱へて絶望的に叫んだ。すると、まるで宿命そのものが彼に宣告するやうに、斷乎たる返辭が聞こえた。

——何處かへ行つてしまふだあ……。身を置すだあ……。女房や子供が可愛いかつたら、お前は どうしても、さうしなきやあなんねえだよ……。俺らと暮してゐれば、あれ達はキリストの懷かみろに抱かれてをるやうに、仕合せなんだから……。

——だちうて、俺に何なにえ行くところがあるだ？

——世間は廣ひろえやな……。

ガウリーラはちよつと考へてから、靜かに言つた。

——なるほど、それあ尤もだ——身を置さにやならねえなあ……。俺は、此處ではまつたく餘計者だから……。



彼の心中は一時に冷えて眞暗になつた。ぼんやり放心状態に陥つた彼は、急に幾つも年を取つて老い込んだやうに、妙に別人の觀があつた。尖つた肩はげんなりとさがり、左の眼も瞑られてゐた。やがて彼は決然としてテーブルを離れると、ラリオンに向かつてぎこちなく手を差し出して、元氣のない聲で言つた。

——ぢやあ、御機嫌よう、きようでい……。好いやうにして呉んねえ……。ただ見棄てねえでやつて呉れよ……。

ラリオンも固くその手を握り返して、兵士の顔を見ぬやうにしながら、齒の間から答へた。

——ずるぶん達者でな……。何もかも心得たよ……。悪く思はねえでなあ……。

ガウリーラは妻の方へ近よつた。

——ぢやあ、フロシカ、これが永の別れだよ……。これから先きは二度目の亭主を大事にしねえよ……。

フロシカの胸はギクンと顫いた。かくも無残に、不公平な人生から辱められた、わが子の父親に對して、火のやうに熱い憐憫の情が赫と燃え立つたのである。——彼女はガウリーラの前に跪くとさめざめと泣き出した。

——ガウリルーシカ！……濟みません……飛んだことをしてしまつただ……。勘忍して。

ガウリーラはサツと手を一つ振ると、よろよろと蹣跚けながら、木の義足でコツコツと床を鳴らしながら、無言のまま扉口の方へ歩いて行つた。醜い彼の顔は歪んで、石のやうに生氣が無かつた。鬨ぎはで立ちどまると、彼は不器用に帽子をかぶつたが、その端が内側へ折れ込んだ。彼は長いことかかつて木の把手を探つた。

ラリオンはその後姿を眺めながら、じつと一つ處に佇んだまま、まるで今やつと目が覺めたばかりで、何が何やらさつぱり合點がゆかぬといつた土いろの顔をして、キョトキョトしながら、しきりに咽喉を鳴らして、片手を帶の間へ挿み、片手で不機嫌さうに赤い頰髯を掻き掻つてゐる。フロシカは床から立ち上らうともせず兩手で顫顫をおさへて、なほも赦しを乞ふてゐるのだつた。

ガウリーラは往來へ出た。

夕刻である。あたりには秋の宵闇がたちこめて、いよいよその濃さを増しつつあつた。死んだやうな鉛いろの空からは細かい糠雨がしとしとと降つてゐる。どこを見ても黒いねばねばした泥潭と、濁つた水溜りばかりである。建の低い百姓小屋が寄るべ無げに澁面をつくつて寒さうに灰いろの地面へしがみついてゐる。あたりには人影ひとつ見あたらぬ。兵士は松葉杖にすがつて、トボトボと往來を辿つて行くのであつた。鼠いろの著ふるした外套は、帯もなく、まるで骸骨のやうに骨張つた彼の上體にみすばらしく羽織られてゐた。木の義足が軟かい地面へ深くめり込み

片方の茶草の長靴を穿いた足は泥濘をピシヤリピシヤリ叩く。ぐつたり疲れて困憊しきつた彼は二歩三步前へ進んでは立ち寄り、苦しうに息をついては、また先きへ歩を進めるのであつた。  
——何といふひどい目に會はされたことだ……。——悄然として、蠅でも追ふやうに手を振りながら、彼は呟やいた。

彼はまるでこれまで知らなかつた人跡未踏の別天地へ迷ひ込んだやうに孤獨で、世界ぢゆうの何人にも用のない人間としての自分をしみじみと感じた。自分が此處で生ひ立ち、作物の種子と共に自分の青春の力を地に積ゑつけて幾多の汗を流した、どんなささやかな物の末まで馴染ぶかい、懐かしの生れ故郷——その生れ故郷までが、もはや彼にとつては他所々々しい赤の他人となつてしまつたのである。そして、これまで彼の心臓を生かして來た全ての親しいものが、二度と歸るべくもなく何處かへ消え去つてしまひ、その代りに、冷たい物悲しい霧が重苦しくドツと押し寄せて來た。

ガウリイラは立ち停つて、さて今は何方へ行つたものかと思案でもするやうに、往來の兩端を、一つきりの眼で眺め惑ふのであつた。

低く垂れさがつた空は澁面をつくり、煩はしい夕闇はいよいよ濃くなつて、どちらを向いてもまるで荒涼たる砂漠のやうなしじまである……。

(福山製本)

昭和十一年九月十五日印刷  
昭和十一年九月二十日發行

改造文庫 第二部 第三百三十四冊  
二つの魂・餘計者  
定價二十錢

股 權  
所 有

譯 者 平 井 肇

發行者 山 本 三 生  
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 福 山 福 太 郎  
東京市牛込區西五軒町卅四番地

發 兌 東京市芝區新橋七丁目十二番地

改 造 社

振替口座東京八四〇二番  
電話芝(45)自一一二四番  
至一一二四番

(福山製本印刷所)

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみが藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆の一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。  
 □此の文庫に收容するものは、東西古今百級の書に亘り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。  
 □此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百級に及ぶ。  
 □表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。  
 □表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。  
 □定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	定價(錢)	送料(錢)
1	一〇	二
2	二〇	四
3	三〇	六
4	四〇	八
5	五〇	一〇
6	六〇	一二
7	七〇	一四
8	八〇	一六

改造文庫第一部目錄

國富論 (上卷)	アダムスミス著 竹内謙二譯	8	古代社會 (上卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	農村問題	荒川實藏著	3
國富論 (中卷)	アダムスミス著 竹内謙二譯	6	古代社會 (下卷)	モルガン著 荒畑寒村譯	5	労働組合論	藤井米藏著	3
國富論 (下卷)	アダムスミス著 竹内謙二譯	6	エミール (上卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	幸徳秋水集	幸徳秋水著	2
人口論	ロバート・マルサス著 リカド著	6	エミール (下卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	中江兆民集	中江兆民著	2
經濟學原理 (上卷)	ステュアート・ミル著 スチユアト・ミル著	1	國家論	オースティン・ギブズ著 廣島定吉譯	2	財產起源論	レヴィンスキイ著 貴島克己譯	1
經濟學原理 (下卷)	ステュアート・ミル著 スチユアト・ミル著	1	金融資本論	猪俣津南雄著	4	組織論	鈴木厚著	3
經濟學方法論	カール・メンガー著 ヤエボンス著	1	日本開化小史	田口卯吉著	2	三民主義論	孫中山著 金井寛三譯	3
社會主義の發展	エンゲルス著 堀利彦譯	1	日本經濟論	田口卯吉著	1	唯一者とその所有	ステイルネル著 辻三郎譯	6
辯證法的唯物觀	デイヴィッド・ヒューム著 山川均譯	2	日本經濟學說の要領	龍本誠一著	2	世事見聞錄	武陽隱士著 本庄榮治郎校訂	4
哲學の實果	デイヴィッド・ヒューム著 山川均譯	1	日本商業史	横井時冬著	4	金融資本論	ヒルファディン著 ヒルファディン譯	7
神と國家	バクスター著 本莊可宗譯	1	日本工業史	横井時冬著	4	近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	2
婦人論	山川菊榮著	6	經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2	我近世農村問題	本庄榮治郎著	3
			リッケルト論文集	リッケルト著	2	マルクスの歴史、社會	クノール著 並に國家理論(上卷)、石川・別府共譯	6
			フッサール論文集	フッサール著	2	マルクスの歴史、社會	クノール著 並に國家理論(下卷)、鳥海森谷濱島譯	7
			女工哀史	細井和喜藏著	4	マルクス主義經濟學	河上肇著	3
			社會進化と地位	ラッパポルト著 山川菊榮譯	2	哲學概説	桑木嚴翠著	3
			近代科學と唯物論	エリオット著 山川均譯	2			

現代哲學思潮	桑木殿翼著	5
宗教の起	ハイリツヒク ノ一著 玉城肇譯	3
カントの平和論	朝永三十郎著	2
近代資本主義	住谷辰本松澤譯	4
近代資本主義	住谷辰本松澤譯	4
近世史論(上)	住谷辰本松澤譯	4
近世史論(下)	住谷辰本松澤譯	4
カウツキ夫妻への	グロザルケセンブル グロザルケセンブル グロザルケセンブル	4
手紙	グロザルケセンブル	4
唯物論の法	佐多忠隆譯	2
天(才)論	トブローノオ著 澤田三郎譯	5
佛蘭西革命史(上)	淡徳三郎著	5
佛蘭西革命史(下)	淡徳三郎著	5
佛蘭西革命史(下)	淡徳三郎著	5
無政府主義	荒畑寒村譯	2
社會主義	荒畑寒村譯	2
財產進化論	荒畑寒村譯	2
帝國主義論	岡田三郎著	3
帝國主義論	石澤新二譯	5
勞働價值説の擁護	塚本三吉譯	2
經濟地理概論	菊川忠雄譯	3
帝國主義	内田久郎譯	3
プレブス經濟學	田所輝明編	3
心理學概論	小宮義孝譯	3
社會意識學概論	ボグダノフ著 林・木村共譯	4
經濟科學概論	ボグダノフ著 林・木村共譯	4
日本醫學史	富士川 游著	5
英國勞働運動史	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
我等の對立	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
マルキシズム方法論	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
倫理と唯物史觀	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會進化	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
原始財產	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會主義への道	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會主義への道	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
阿片溺愛者の告白	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
建築と繪畫	内田久郎譯	5
藝術とは何ぞや	木村 義孝譯	3
プロレタリア	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
藝術哲學	植田壽藏著	3
近代の戀愛觀	厨川白村著	3
象牙の塔を	厨川白村著	3
十字街頭を往く	厨川白村著	3
近代文學十講	厨川白村著	3
英詩選	厨川白村著	3
ヘーゲル精神哲學概要(上)	クレーンハイエル著 田村 實譯	6
ヘーゲル精神哲學概要(下)	クレーンハイエル著 田村 實譯	6
ドイツイツ史	フランツ・メーリン著 栗原 佑譯	6
宗教科學論争史	ドレーパー著 荒畑寒村譯	6
中産階級史	ルイス・コリー著 宮田 保郎譯	4
第一インダナシ	内垣謙三譯	6
第一インダナシ	内垣謙三譯	6
ヨナル史(第二部)	内垣謙三譯	4
經濟學概論	住谷辰本松澤譯	5

ソヴェートロシア	中村亮平著	5
の農業政策	中村亮平著	5
レーニン主義	中村亮平著	3
の基礎	中村亮平著	3
エルフト綱領解説	三輪壽壯譯	3
マルクス經濟學大綱	ボルハルト著 中村亮平譯	2
キリスト教の本質	フオイトハッパ著 藤井米藏譯	5
唯物論史入門	藤井米藏譯	5
日本美術(上卷)	中村亮平著	5
日本美術(下卷)	中村亮平著	5
の知識	中村亮平著	6
泰西美術の知識	中村亮平著	6
民族移動史	小山榮三譯	2
東洋美術の知識(上卷)	中村亮平著	6
東洋美術の知識(下卷)	中村亮平著	6
三民主義續篇	孫中山著 金井寛三譯	4
婚姻と離婚	青山道夫著	3
何をなすべきか	山内房吉著	4
人生論	柳田泉譯	4
文藝評論集	小林秀雄著	3

プレブス經濟學	田所輝明編	3
心理學概論	小宮義孝譯	3
社會意識學概論	ボグダノフ著 林・木村共譯	4
經濟科學概論	ボグダノフ著 林・木村共譯	4
日本醫學史	富士川 游著	5
英國勞働運動史	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
我等の對立	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
マルキシズム方法論	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
倫理と唯物史觀	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會進化	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
原始財產	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會主義への道	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
社會主義への道	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3
阿片溺愛者の告白	ア・ド・ラ・カウツキ著 竹尾 弼譯	3

改造文庫第二部目錄

古事記	澤田三郎譯	5
萬葉集(上卷)	折口 信天校訂	4
萬葉集(下卷)	折口 信天校訂	4
古今集	吉澤 義則校訂	5
新古今和歌集	吉澤 義則校訂	5
新源氏物語(上卷)	折口 信天校訂	4
新源氏物語(下卷)	折口 信天校訂	4
枕草子	山岸 徳平校訂	4
平家物語(上卷)	吉澤 義則校訂	4
平家物語(下卷)	吉澤 義則校訂	4
雨月物語	山口 剛校訂	2
山家集	藤原 茂吉校訂	2
俳諧七部集	藤原 茂吉校訂	3
蕪村七部集	藤原 茂吉校訂	3
伊勢物語	久松 潜一校訂	2
神皇正統記	宮地 直一校訂	3

おらが	春萩原井泉水校訂	3
蟻の生	梅田リョウコ作 園信一 訳	3
新花つみ	(日記) 萩原 井泉水編	3
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	3
愛なき人々	谷崎潤一郎著	3
痴人の愛	谷崎潤一郎著	4
海	へ島崎藤村著	5
屋上の土	古泉千樞著	5
寡婦	マルタ オルゼニエウコ著 清見陸 訳	5
句集	虚子 高濱虚子著	6
井泉水句集	萩原井泉水著	6
サニ	アルツイバセフ著 武林無想庵譯	6
一青年の告白	シヨウジ・ムア著 辻 潤譯	6
一週	リベインスキー著 池谷信三郎譯	2
室生犀星詩集	室生犀星著	5
千家元麿詩集	千家元麿著	3
横瀬夜雨詩集	横瀬夜雨著	5
修禪寺物語	岡本綺堂著	3
少年の悲哀	國木田獨步著	2
運命論	者 國木田獨步著	2
愛	慾 武者小路實篤著	2
作者別萬葉全集	土岐善賢編著	6
作者別萬葉以後	土岐善賢編著	6
自	傳片山 潛著	3
日本	橋泉 鏡花著	5
佛蘭西童話集(第一)	ボイモン夫人著 長松英一譯	5
佛蘭西童話集(第二)	ドルノア夫人著 長松英一譯	5
佛蘭西童話集(第三)	ヘンロイ著 長松英一譯	5
佛蘭西童話集(第四)	長松英一譯	5
新死の如く強し	モオパッサン著 中村星湖譯	5
巴里の憂鬱	ボオドレール著 三好達治譯	2
死の舞踏	ストリンダベリ著 山本有三譯	2
野生の呼聲	シャップ・ロンドン著 花 園 兼 定譯	3
奈落の人々	和 律 次郎譯 園 兼 定譯	3
争	無名作家他廿 の日記三篇(現代物)	2
出世	他廿(短篇小説) 七篇(現代物)	4
噂の發生	他廿(短篇小説) 六篇(現代物)	4
父歸る	他廿(戯曲) 大篇(現代物)	5
藤十郎	他廿(戯曲) 三篇(現代物)	5
眞珠夫人	人 菊池 寛著	6
慈悲心	鳥 菊池 寛著	4
新	珠 菊池 寛著	5
火	華 菊池 寛著	4
受難	華 菊池 寛著	5
赤い白	鳥 菊池 寛著	3
明眸	禍 菊池 寛著	5
新女性	鑑 菊池 寛著	3
陸の人	魚 菊池 寛著	4

奥蕉翁	細道 萩原 露月校訂	3
菅根崎心中・心中天の黒木	勸藏校註	3
網島・女殺油地獄	鏡 吉澤 義則校註	5
大	徒 然 草 吉澤 義則校註	3
日蓮上人集	社 内編	3
親鸞聖人集	(近)	1
北村透谷選集	島崎藤村編	1
樋口一葉選集	(二)樋口一葉著	1
平	凡二葉亭 四迷著	1
子規俳話	正岡子規著	3
子規歌論	歌話 正岡子規著	3
坊つちやん	夏目漱石著	2
草	枕 夏目漱石著	2
それか	ら 夏目漱石著	3
悲しき	玩 具 砂 石 川 啄 木 著	2
我等の一團と	彼 石 川 啄 木 著	1
雲は天才である	山 陰 土 産 其 他 島 崎 藤 村 著	2
作曲	民 謡 集 北 原 白 秋 著	2
獄	中 記 神 近 市 子 著	2
厭世家の誕生日	佐 藤 春 夫 著	1
日	勞 働 者 の 居 ない 船 葉 山 嘉 樹 著	1
海に生くる人々	葉 山 嘉 樹 著	1
小	公 子 若 松 賤 子 著	2
ホワイト・フランク	堀 利 彦 著	3
は	や り 唄 小 杉 天 外 著	3
自選	朝 の 螢 齋 藤 茂 吉 著	2
自選	十 年 島 木 赤 彦 著	2
自選	川 の ほ と り 古 泉 千 樞 著	2
自選	松 の 芽 中 村 憲 吉 著	2
自選	海 や ま の だ あ ひ 釋 迢 空 著	4
自選	立 春 木 下 利 玄 著	2
自選	花 櫻 北 原 白 秋 著	3
自選	人間往來 與 謝 野 晶 子 著	2
自選	槻 の 木 窪 田 空 穂 著	2
自選	野原の郭公 若 山 牧 水 著	2
自選	原生 林 前 田 夕 暮 著	3
自選	空を仰ぐ 土 岐 善 賢 著	2
自選	童 謠 集 北 原 白 秋 著	2
自選	國民歌謠集 北 原 白 秋 著	2
自選	舞 踊 詞 集 北 原 白 秋 著	2
自選	背 德 者 ア ン ド レ ・ シ ャ ッ プ 著 石 川 淳 譯	2
自選	チエホフ書簡集 内 山 賢 次 譯	5
自選	鶯 の 卵 土 岐 善 賢 著	3
自選	信 綱 文 集 佐 々 木 信 綱 著	2
自選	信 綱 歌 集 佐 々 木 信 綱 著	2
自選	信 綱 話 佐 々 木 信 綱 著	2
自選	愚 庵 歌 集 齋 藤 茂 吉 編	3
自選	芭蕉遺語集 萩 原 井 泉 水 校 訂	3
自選	茶七番日記(上卷) 萩 原 井 泉 水 校 訂	4
自選	茶七番日記(下卷) 萩 原 井 泉 水 校 訂	4

第二の接吻菊池 寛著 3	イブセン全集十 (刊近)	芭蕉書簡集 萩原野月著 3
東京行進曲菊池 寛著 3	キの手記 エウイビトニツキ 剛著 4	草雙紙 選尾崎久彌編 5
結婚二重奏菊池 寛著 3	聖書物語 (舊約) ルン 神近市子著 3	矢島柳 堂志賀直哉著 2
不壞の白珠菊池 寛著 3	聖書物語 (新約) ルン 神近市子著 3	焚島 火志賀直哉著 2
この人を見よ エイチエ著 4	洋服 筒 六笠武生著 2	老走 人志賀直哉著 2
父と娘 (他四篇) 武者小路實篤著 4	今戸心 中廣津柳浪著 3	網走 まで志賀直哉著 2
わしも知 (他十三篇) 武者小路實篤著 4	嬰兒殺し 山本有三著 3	速夫の妹 志賀直哉著 2
人生雜感 (感想集) 武者小路實篤著 4	芭蕉夜船草の詩 吉田敏三郎著 3	好人物の夫婦 志賀直哉著 2
イブセン全集一 河野永田小寺譯 3	ドレフユース事件 大佛次郎著 3	雪の 日志賀直哉著 2
イブセン全集二 大山長谷部譯 5	新人國記 ア・フランス著 4	暗夜行路 (前) 志賀直哉著 3
イブセン全集三 中村伸木譯 5	シラー詩集 小栗孝則譯 4	短歌 集 石川啄木著 4
イブセン全集四 5	どつこいおいらはト ラ ア著 2	小説集 (上) 石川啄木著 5
イブセン全集五 大山大關中村譯 5	獄窓 和久太郎著 5	小説集 (下) 石川啄木著 5
イブセン全集六 5	結婚の悲劇 アルツイバアンシエフ著 5	評論感想集 (上) 石川啄木著 4
イブセン全集七 5	結婚の路 (上) ア・トルストイ著 4	評論感想集 (下) 石川啄木著 4
イブセン全集八 5	苦難の路 (下) ア・トルストイ著 4	書簡集 (上) 石川啄木著 5
イブセン全集九 5		

書簡集 (下) 前年論 石川啄木著 4	大暴風雨時代 前田河廣一郎著 5	彌太郎 笠子母澤寛著 4
國歌八 論 土岐善麿編 3	浅草紅團 川端康成著 5	神變麝香猫 (上卷) 吉川英治著 4
出 發 島崎藤村著 3	女性讚 (他四篇) 片岡鐵兵著 5	神變麝香猫 (下卷) 吉川英治著 3
新選秀歌百首 齋藤茂吉著 3	喧嘩 駕籠 長谷川伸著 5	女 給 廣津和郎著 5
性に眼覚める頃 室生犀星著 4	角兵衛物語 長谷川伸著 5	伊太利物語 平井肇著 5
多情佛心 (前篇) 星見 稔著 3	唐人 お吉 十一谷義三郎著 2	闇の力・生ける屍 トルストイ著 4
多情佛心 (後篇) 星見 稔著 3	時の敗者 唐人 お吉 十一谷義三郎著 4	蟹工船・工場細胞 小林多喜二著 4
苦の世 界 宇野浩二著 3	笑ふ男・笑ふ女 十一谷義三郎著 5	不在地主・オルグ 小林多喜二著 4
山 戀 ひ 宇野浩二著 4	或る女 (上卷) 有島武郎著 4	宣言・クララの出家 有島武郎著 3
天保赤門黨 土師清二著 5	或る女 (下卷) 有島武郎著 3	迷 路 有島武郎著 3
血染のパイプ 甲賀三郎著 4	星座・生れ出る惱み 有島武郎著 4	カインの末裔・潮霧 有島武郎著 2
平妖傳 (上卷) 佐藤春夫著 4	有島武郎戲曲集 有島武郎著 4	お末の死・かんかん蟲 有島武郎著 2
平妖傳 (下卷) 佐藤春夫著 3	有島武郎書簡集 有島武郎著 5	旅する心 有島武郎著 2
田園の憂鬱 佐藤春夫著 4	有島武郎日記集 有島武郎著 4	小さき者へ・石にひ 有島武郎著 (刊近)
都會の憂鬱 佐藤春夫著 4	社會詩集 生田春月譯 5	旅する心 有島武郎著 (刊近)
自選短篇集 林房雄著 7	戀愛詩集 生田春月譯 5	短篇 集 有島武郎著 (刊近)
斬るな劍 他九篇 白井喬二著 5	續放浪記 林英美子著 5	感想 集 有島武郎著 (刊近)
		俳諧續七部集 宇田 久校註 4

569  
142

其角七部集	宇田久校註	4	葛西善藏小説集一	葛西善藏著	3
牧水歌集(一)	若山牧水著	4	葛西善藏小説集二	葛西善藏著	4
牧水紀行文集	若山牧水著	4	葛西善藏小説集三	葛西善藏著	4
明治大正詩史概観	北原白秋著	4	葛西善藏小説集四	葛西善藏著	4
長惡	魔レールモントフ著	3	葛西善藏小説集五	葛西善藏著	3
アロシ短篇集(五月の夜)	蔵原惟人譯	3	葛西善藏小説集六	葛西善藏著	3
貝殻追放(上卷)	水上瀧太郎著	7	葛西善藏感想集	葛西善藏著	5
貝殻追放(下卷)	水上瀧太郎著	7	頼朝・爲朝	幸田露伴著	3
歌鏡	葉窪田空穂著	4	幽秘記	幸田露伴著	6
新我等の心	モウパッサン著 中村星淵譯	4	青年(上卷)	林房雄著	4
牧水歌集(一)	若山牧水著	4	青年(下卷)	林房雄著	4
牧水歌集(二)	若山牧水著	4	樋口一葉選集(一)	樋口一葉著	5
好色一代男	神谷鶴伴校註	5	シユロツフエン	クライスト著	6
チエーホフ傑作集	チエーホフ著	4	シユタイン家の人々	濱野修譯	6
人類文化史物語	ヴァン・ルーン著	5	ヘルマンの公子	濱野修譯	5
人類文化史物語	ヴァン・ルーン著	5			
人類文化史物語	ヴァン・ルーン著	5			
青牛集	古泉千樞著	5			

(以下續刊)

Fragment of a decorative label on the left page.



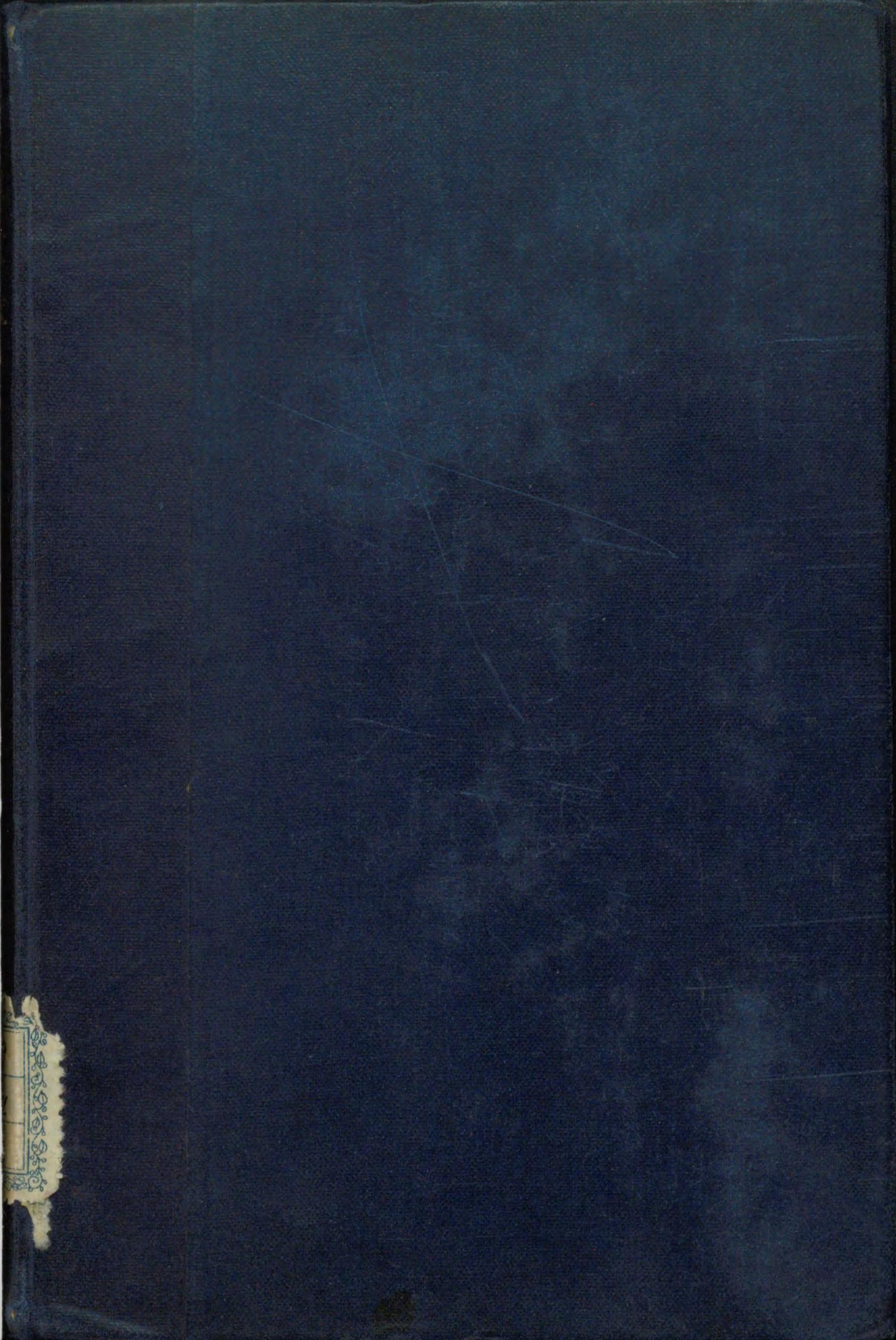
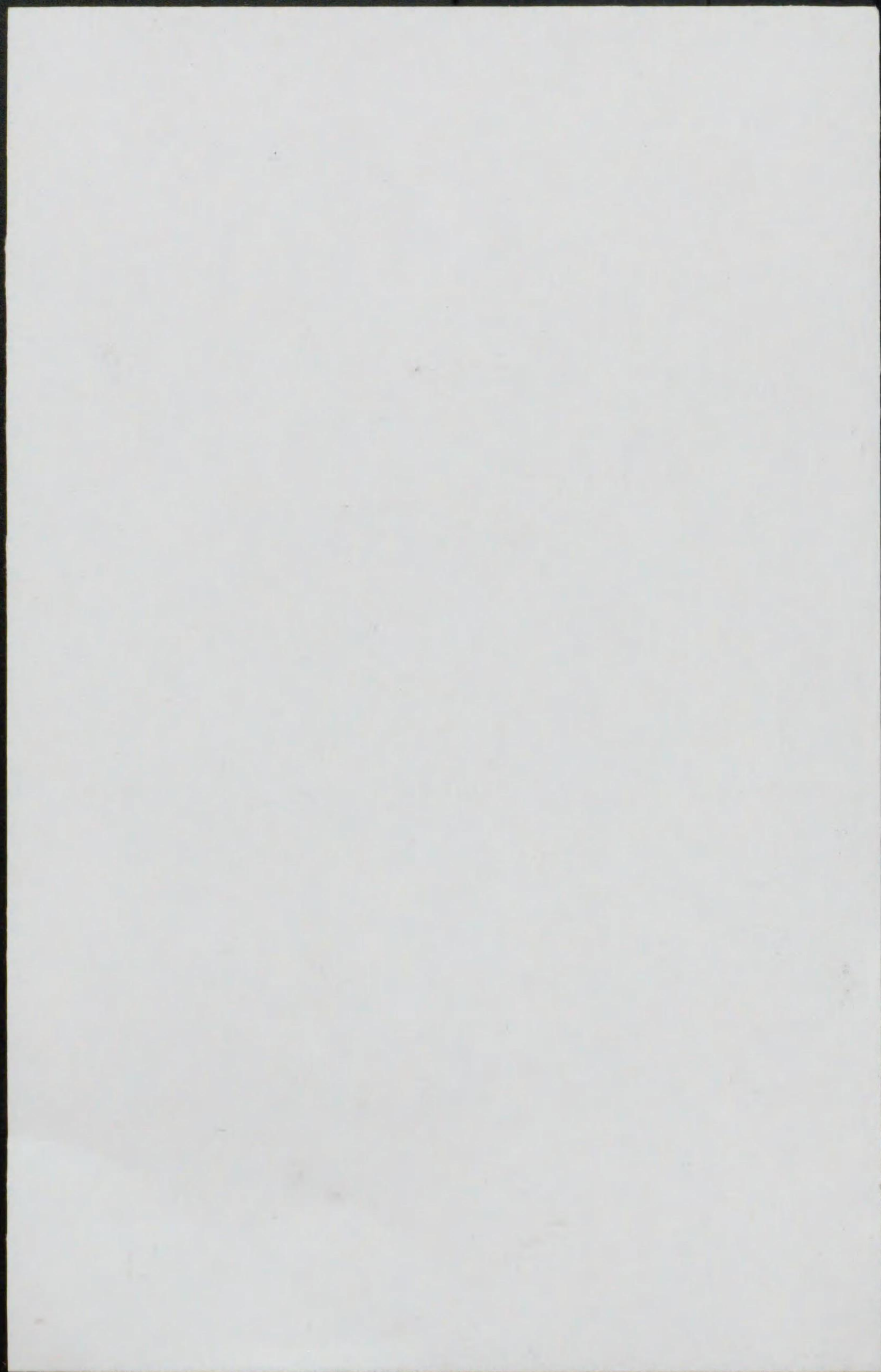
卅

納本





569  
142

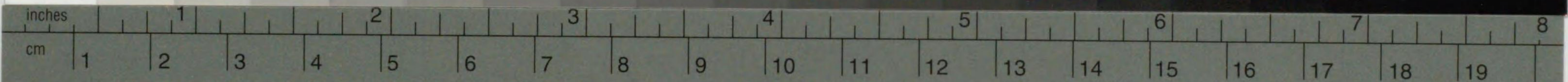


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

